

『安樂集』 訳註（四） 第四大門・第五大門・第六大門

齊藤隆信・曾和義宏
加藤弘孝・永田真隆
小川法道

【凡例】

- ・底本（底）には大谷大学博物館蔵順藝本（八～九世紀ごろに書写された高山寺旧蔵本の敷写本）を用いた
- ・校本には下記の二種を用いた

④…元禄一一（一六九八）年刊、義山校本（佛教大学図書館蔵）

⑤…宝永元（一七〇四）年刊、道章校本（龍谷大学図書館蔵）

- ・底本では読めないと判断した場合に限って校本を用い、その校記を頭註に示した
- ・異体字はすべて正字に改めた
- ・本文と校記は原則として旧字体とし、現代語訳と訳註は新字体とした
- ・その他、『安樂集』の校訂に関しては『大正新脩大蔵経』四七巻、

および『浄土真宗聖典（七祖篇）』（浄土真宗聖典編纂委員会編、一九九二年）を、また書誌に関しては『浄土教典籍目録』（佛教大学総合研究所編、二〇一一年）を参照されたい

・『安樂集』本文中の經典引用に関しては、内藤知康『安樂集講読』（永田文昌堂、一九九九年）、及び杉山裕俊『『安樂集』の研究』（大正大学への学位請求論文、二〇一四年）を参照した

安樂集卷下 釋道綽撰

第四大門中、有三番料簡。第一、依中國三藏法師、并此土大德等、皆共詳審聖教、嘆歸淨土、今以勸依。第二、據此經宗及餘大乘諸部、凡聖脩入、多明念佛三昧以爲要門。第三、問答解釋、顯念佛者、得種種功能利益、不可思議。

第一、依中國及以此土大德所行者、余五翳面牆、豈寧自輒。但以遊歷披勘、敬有師承。

何者、謂中國大乘法師流支三藏。次有大德、呵避名利、則有惠寵法師。次有大德、尋常敷演、每感聖僧來聽、則有道場法師。次有大德、和光孤栖、二國慕仰、則有曇鸞法師。次有大德、禪觀獨秀、則有大海禪師。次有大德、聰惠守戒、則有齊朝上統。

『安樂集』卷下 釈道綽撰す

第四章では、以下の三節に分類する。第一節には、インドの^①三藏法師と、中国の高僧たちは皆ともに聖教を子細に探究し、西方の淨土を讃じて拠り処にしているので、今の人々にも勧めるのである。第二節には、この『觀無量壽經』の教旨及び諸々の大乘經典では、凡夫も聖者も等しく修めており、多く念仏三昧を肝要な教えとしていることを明らかにする。第三節には、問答を通して解釈し、念仏する者が種々の功能や利益を得ることは、我々の言葉も思慮も及ばないことを明らかにする。

第一節に、「インドと中国の高僧がおさめた行を根拠として、〔今の人々に勧める〕」とは、私には五つの障り（煙・雲・塵・霧・日食^②）があり、見識は暗いので、^③どうして簡単に明らかにできようか。ただ高僧たちの諸伝記を調べ、考察することによって、師資相承があることを尊重するだけである。

それはどのようなものかという点、「まず初めに」インドの大乘法師の菩提流支三藏がいる。次に名誉と利益を退けた大徳が惠寵法師である。次に平生の講説の度に聖僧の來聴を感じていた大徳が道場法師である。次にその徳を内に秘め、孤高でありながら魏と梁の^④二国の皇帝が敬慕していた大徳が曇鸞法師である。^⑤次には禪觀がひととき秀でていた大徳が大海禪師である。次には聡明で戒律に堅固な大徳が齊朝の上統であった法上である。^⑥

①底「帝」元宝

「諦」

然前六大徳竝是二諦①神鏡、斯乃佛法綱維。志行殊倫、古今實希。皆共詳審大乘、嘆歸淨土、乃是無上要門也。

問曰、既云、嘆歸淨土乃是要門者、未知此等諸徳臨終時、皆有靈驗已不。

答曰、皆有不虚。如曇鸞法師、康存之日、常脩淨土。亦每有世俗君子來呵法師曰、十方佛國皆爲淨土、法師何乃獨意注西。豈非偏見生也。

法師對曰、吾既凡夫、智慧淺短、未入地位。念力須均、如以置草引牛、恒須繫心槽檻。豈得縱放、全無所歸。

②底「絃」元宝

雖復難者紛絃②、而法師獨決。是以無問一切道俗③、但與法師一相遇者、若未生正信、勸令生信、若已

これら六人の大徳はみな二諦（真諦・俗諦）を映すすぐれた鏡、すなわち仏法を担う要である。その志と行は超絶しており、古今を通して稀なことである。「六人の大徳が」みな大乘仏教を子細に検討し、浄土の教えを讃嘆し拠り所としたので、これこそが最上の教えなのである。

問う。「浄土の教えを讃嘆し拠り所としたので、これこそが最上の教えなのである」と言うならば、これらの諸大徳の臨終の時には、みな何か靈驗があつたのだろうか。

答える。六大徳にはみな、確かな靈驗があつた。曇鸞法師などは、存命の時には、常に西方浄土の行を修めていた。また常に世俗の識者が、法師をあざ笑つて言つた。「十方の仏国土はみな浄土でありながら、どうして法師だけが西方の極樂浄土に意を寄せるのですか。それは偏つた往生ではないなどと言えるでしょうか」と。

法師は答えて言つた。「私は凡夫であり、智慧は浅く、いまだ菩薩の地位（初歡喜地）に入っていない。想念を等しい状態にたもつことは、草を置いて牛を引き、常に心を飼葉おけに繋いでおくようなものである。どうして勝手気ままに全く拠り所がない状態にしてよいだろうか。

たとえ非難する者が多くても、曇鸞法師は「西方に往生すること」を決めていた。そういう訳で出家者と在家者とに関わらず、た

③底 欠損 元 宝

「俗」

生正信者、皆勸歸淨國。

④底 「方左」 元

宝 「左右」

⑤底 「逆」 元 宝

「迎」

⑥底 なし 元 宝

「也」

是故法師臨命終時、寺傍左右④、道俗、皆見幡華映

院、盡聞異香、音樂迎⑤接、遂往生也。餘之大德臨

命終時皆有徵詳。若欲具談往生之相、竝不可思議也

⑥。

第二明此彼諸經、多明念佛三昧爲宗者、就中有八番。

初二明一相三昧。後六就緣依相、明念佛三昧。

第一依華首經。佛告堅意菩薩、三昧有二種。一者有

一相三昧、二者有衆相三昧。

一相三昧者、有菩薩聞某世界有某如來現在說法。菩

薩取是佛相、以現在前、若坐道場、若轉法輪、大衆

圍繞。

取如是相、收攝諸根、心不馳散、專念一佛、不捨是

だ法師と一度でも値遇を得た者で正しい信心が生じていない者には、信を生じるように教化し、すでに正しい信が生じている者には、一同に西方浄土の教えに帰依することを勧めたのである。

そのような訳で曇鸞法師が示寂した時には、寺の周辺で出家者、在家者がみな、幡や花が寺院に映る様を目撃し、珍しい香りを感知取り、音楽を奏でる聖衆の来迎があつて、往生を遂げたのである。他の「五人の」大徳が示寂する時にもみな奇瑞があつた。もしもそれらの往生の様相を残さず述べようとするならば、全てが我々の言葉も思慮も及ばないものばかりである。

第二節に、『観無量寿経』やその他の經典の多くが念仏三昧を教旨としていることを明らかにする」とは、八つの観点がある。初めの二つは一相三昧に関して明らかにする。後の六つは様々な経に説かれている念仏の内容をもつて念仏三昧を明らかにする。

第一には『華首経』にもとづく。すなわち「仏は、堅意菩薩に次のように告げた。△三昧には二種類がある。一つは一相三昧であり、二つは衆相三昧である。

一相三昧とは、ある世界である如来が今も在して、說法していることを聞いた菩薩が、この仏が現前し、あるいは道場に座し、あるいは說法し、大衆に囲まれている姿を観ることである。

そのような姿を観想し、諸々の感覚器官を統一し、心が散乱しな

縁。如是菩薩、於如來相及世界相、了達無相。常如是觀、如是行、不離是緣、是時佛像即現在前、而爲說法。

菩薩爾時、深生恭敬、聽受是法。若深若淺、轉加尊重。菩薩住是三昧、聞說諸法皆可壞相、聞已受持。從三昧起、能爲四衆演說是法。佛告堅意、是名菩薩入一相三昧門。

⑦底「波」元宝
「般」

第二依文殊般⑦若明一行三昧者、時文殊師利白佛言、世尊、云何名爲一行三昧。

佛言、一行三昧者、若善男子・善女人、應在空閑處、捨諸亂意、隨佛方所端身正向、不取相貌繫心一佛、專稱名字。念無休息、即是念中、能見過現未來三世諸佛。

いように、専ら一仏のみを念じて対象を捨てない。このような菩薩は、如來の相と世界の相に対して、それらが無相であると通曉するのである。常にこのように觀想し行じて「心が」対象から離れなければ、この時に仏の姿が即座に目の前に出現して、菩薩のために説法されるのである。

菩薩は、その時、深く敬いの心から、この教法を聴いて受け入れる。その理解の深淺に関わらず、「みな」更なる尊重の思いが増進するのである。菩薩はこの三昧の境地にあつて、諸法はすべて滅すべき相であると聞き、聞き終わって記憶する。そして三昧の境地より脱して、四衆（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）の爲に、この教えを説き示すのである」と。「また」仏は、堅意菩薩に「これを菩薩が一相三昧に入ると名付ける」と告げた^⑧。

第二に『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』にもとづき一行三昧について明かすとは、次のような次第である。「ある時、文殊師利菩薩が、仏に〈世尊よ、どのようなものを一行三昧と言うのでしょうか〉とお尋ねした。

仏は以下のようにお説きになった。すなわちへ一行三昧とは、以下のようなものである。善男子・善女人が、閑寂な場所に留まつて、様々な乱れる心を捨て、仏の方向に身を正して真つすぐ向き合い、仏の姿かたちにとらわれることなく、心を一仏にかけて、専ら仏の名を称えるべきである。一瞬たりとも休まなければ、過

何以故。念一佛功德無量、無邊。即與無量諸佛功德無二。是名菩薩一行三昧。

第三依涅槃經。佛言、若人但能至心常脩念佛三昧者、十方諸佛恒見此人、如現在前。

是故涅槃經云、佛告迦葉菩薩、若有善男子、善女人、常能至心專念佛者、若在山林、若在聚落、若晝若夜、若坐若臥、諸佛世尊常見此人、如現目前、恒與此人而作受施。

第四依觀經及餘諸部、所脩萬行、但能迴願、莫不皆生。然念佛一門將爲要路。

何者、審量聖教、有始終兩益。若欲生善起行、則普該諸度。若滅惡消災、則總治諸障。故下經云、念佛衆生、攝取不捨。壽盡必生、此名始益。

去・現在・未來の三世の諸仏を見ることが出来る。

それはなぜかと言うと、心を一仏にかける功德は、計り知ることができず、限りがない。数えきれないほどの諸仏がそなえる功德と異なるものではないからである。そのような訳でこれを菩薩の一行三昧と名付けるのである⁽⁹⁾と。

第三には『大般涅槃經』によると、「仏はへもし心から常に念仏三昧を修したならば、十方世界の諸仏は常にこの人を見て、目の前に現れる⁽¹⁰⁾」とお説きになった⁽¹⁰⁾とある。

このような訳で『大般涅槃經』では、次のように説かれている。「仏が迦葉菩薩に告げた。〈善男子・善女人が、常に心から専ら念仏すれば、山林にいても、集落にいても、昼であつても、夜であつても、坐つていても、臥していても、諸仏世尊は常にこの人を見て、目の前に現れ、常にそばにいてその施しを受ける⁽¹¹⁾〉と。

第四には『観無量壽經』および他の諸經典によれば、修めた万行を廻向して往生を願えば、必ずその通りになる。しかし、念仏の一門こそが大切な教えとなるのである。

何故かと言うと、聖教を詳しく調べてみると〔念仏三昧には〕始と終の二つの利益があるからである。もし善行（念仏三昧）を修める時には、あまねく六波羅蜜などを備え、悪災を除却する時には、〔念仏三昧は〕完全に種々の煩惱を退治するのである。だか

⑧底「治」元宝
「沾」

言終益者、依觀音授記經云、阿彌陀佛住世長久、兆載永劫亦有滅度。般涅槃時、唯有觀音勢至、住持安樂、接引十方。其佛滅度、亦與住世時節等同。然彼國衆生、一切無有觀見佛者、唯有一向專念阿彌陀佛往生者、常見彌陀現在不滅。此即是其終時益也。所脩餘行迴向皆生。世尊滅度有觀不觀。勸後代審量、使沾⑧遠益也。

⑨底「啓」元宝
「啓」

第五依般舟經云、時有跋陀和菩薩、於此國土、聞有阿彌陀佛、數數係念。因是念故、見阿彌陀佛。既見佛已、即從啓⑨問、當行何法、得生彼國。

ら『觀無量壽經』に「念仏する衆生を救い取って見捨てることがない^⑬」と説かれている。寿命が尽きれば必ずや「極樂浄土に」生まれる。これを始益というのである。

終益というのは、『觀世音菩薩授記經』によると以下のように説かれる。「阿彌陀仏がこの世界に在ることは長久にわたるが、兆載永劫の年月を経て滅度する。阿彌陀仏が般涅槃する時には、ただ觀音菩薩と勢至菩薩が〔順次、仏となり〕安樂世界に留まって、十方世界の衆生を導く。それら三仏が滅度することや世に留まっている期間はみな同じである。だから安樂世界の衆生はみな阿彌陀仏を見ることはない。しかし、ただひたすら阿彌陀仏を念じて往生した者だけが、常に阿彌陀仏が目の前に現れて入滅しない様を見るのである^⑭」と。これこそが終時の利益なのである。念仏以外の行を修めた者もその功德を振り向けて往生できるが、阿彌陀仏の滅度にともない、その姿を見ることができずとできない者とが^⑮いる。そのような訳で後の時代にもこのことを子細に推し量ることを勧める。どうか終益（見仏）が得られますように^⑯。

第五に『般舟三昧經』によると以下のように説かれている。「ある時、跋陀和菩薩が、この娑婆世界において、阿彌陀仏が出現していることを聞き、念仏に精進した。この念仏によって阿彌陀仏を見ることができた。そして仏の姿を見たあとで（どのような教えを行わずに）阿彌陀仏の極樂浄土に往生できるのでしようか」と質問した。

爾時阿彌陀佛語是菩薩言、欲來生我國者、常念我名莫有休息。如是得來生我國土。常念佛身三十二相悉皆具足、光明徹照、端政無比。

⑩底欠損元金
「當」

第六依大智度論、有三番解釋。第一佛是無上法王、菩薩爲法臣。所尊、所重唯佛世尊。是故應當⑩常念佛也。

第二有諸菩薩自云、我從曠劫以來、得蒙世尊長養。我等法身、智身、大慈悲身、禪定、智慧、無量行願、由佛得成。爲報恩故、常願近佛。亦如大臣蒙王恩寵、常念其主。

第三有諸菩薩復作是言、我於因地遇惡知識、誹謗波若、墮於惡道、逕無量劫。雖脩餘行、未能得出。後於一時依善知識邊、教我行念佛三昧、其時即能併遣諸障、方得解脫。有斯大益故、不願離佛。

その時に阿彌陀仏は、跋陀和菩薩に以下のように説いた。(私の極樂浄土に往生しようとする者は、常に私の名を念じて中断してはならない。そのように念仏するならば、私の国に往生することができる。また常に仏身の三十二相をみな具え、光明が遮られることなく照らし、端正な有様は他に較べるものがないことを念じなさい^⑪)と説いている。

第六には、『大智度論』に依ると三種の解釈がある。第一に、「仏はこの上ない法王であり、菩薩は法王の家臣である。尊重する対象はただ世尊のみである。そのような訳で常に仏を念ずるべきなのである^⑫」。

第二には、諸々の菩薩が自ら述べている。「私たちは久遠の昔から仏による教化を蒙ってきた。私たちの法身、智身、大慈悲身^⑬、禪定、智慧、数多の修行や誓願などは、仏〔の教化〕によって成じできるのである。仏恩に報いるために、常に仏に近づくことを願っている。これは大臣が国王の恩寵を蒙って、常にその主君に思いを寄せているようなものである^⑭」。

第三には、諸々の菩薩がまた以下のように述べている。「私たちは修行中に、悪知識に出遇ったために智慧を誹謗し、惡道に墮ちて無量劫を経ってしまった。〔念仏以外の〕様々な行を修したけれども、出離はかなわなかった。その後のある時、善知識に帰依し

⑪底「五」元宝
「七」
⑫底「世」元宝
「在」

第七⑪依華嚴經云、寧於無量劫具受一切苦、終不遠如來、不觀自在⑫力。

又云、念佛三昧必見佛、命終之後生佛前、見彼臨終勸念佛、又示尊像令瞻敬。

又善財童子求善知識、詣功德雲比丘所白言、大師、云何修菩薩道、歸普賢行也。

⑬底欠損元宝
「世」
⑭底欠損元宝
「見」

是時比丘告善財曰、我於世⑬尊智慧海中唯知一法、謂念佛三昧門。何者、於此三昧門中、悉能觀見⑭一切諸佛及其眷屬、嚴淨佛刹、能令衆生遠離顛倒。

た。「その善知識は」私に念仏三昧を修めさせると、たちどころに種種の煩惱を除却し、解脱できたのである。このような大きな利益があるので、仏から離れることを願わないのである」^{②①}と。

第七には、『大方広仏華嚴經』に「たとえ無量劫にわたって、あらゆる苦を受けようとも、如來から遠ざかつて、仏の自在力を見ないことがないように」^{②②}と説かれている。

また『大方広仏華嚴經』には、「念仏三昧を行じたならば、必ずや仏を見ることができ、命終の後に仏の前に生まれるのである。他人の臨終に際しては念仏を勧め、また仏の尊像を示して恭敬の心を生じさせなさい」^{②③}と説いている。

また『大方広仏華嚴經』には、以下のようにある。「善財童子は、善知識を求めて功德雲比丘を尋ね、へ大師よ、どのように菩薩道を修めたならば、普賢の行と等しくなるのでしょうか」と申し上げた。

この時、功德雲比丘は善財童子に答えた。へ私は世尊の広い智慧から説かれた諸法の中でただ一つの教えのみを知っている。それは念仏三昧の教えである。どのような教えかと言えば、この念仏三昧の教えにあつては、あらゆる諸仏と、その眷屬、そして飾られた清浄な仏国土を見ることができ、衆生を誤った見方から離れさせることができる教えである。

念佛三昧門者、於微細境界中、見一切佛自在境界、得諸劫不顛倒。念佛三昧門者、能起一切佛刹、無能壞者、普見諸佛、得三世不顛倒。

時功德雲比丘告善財言、佛法深奥、廣大無邊。我所知者、唯得此一念佛三昧門、餘妙境界、出過數量、我所未知也。

第八依海龍王經、時海龍王白佛言、世尊、弟^⑮子求生阿彌陀佛國。當脩何^⑯行、得生彼土。

⑮ 底「第」元宝
「弟」
⑯ 底欠損元宝
「何」

佛告龍王、若欲生彼國者、當行八法。何等爲八。一者常念諸佛、二者供養如來、三者咨嗟世尊、四者作佛形像、脩諸功德、五者迴願往生、六者心不怯弱、七者一心精進、八者求佛正惠。佛告龍王、一切衆生具斯八法、常不離佛也。

念仏三昧の教えは、たとえ細小の境界においても、あらゆる仏の自在な境界を見ることができ、永きにわたって誤った見解に陥ることがない。念仏三昧の教えは、あらゆる仏国土を想い起こすことができ、これを破壊できる者はおらず、諸仏を全て見て、三世にわたって誤った見解に陥ることがないのである」と。

その時、また功德雲比丘は善財童子に次のように告げた。〈仏の教法は、深い海のように、広大であって窮まりがない。私を知るところは、ただ一つの念仏三昧の教えのみを得るということであって、それ以外の微妙な境界は数多く、私が知り得るところではないのだ^⑮と〉。

第八には『海龍王經』による。「ある時、海龍王が仏に〈世尊よ、弟子の私は、阿彌陀仏國に生まれることを望んでいます^⑯。どのような行を修めれば、阿彌陀仏の極樂浄土に生まれることができるでしょうか〉と申し上げた。

仏は、海龍王に告げた。〈阿彌陀仏の極樂浄土に生まれることを望むのであるならば、八つの教えを行じなければならない。どのような行を八つの教えとするのか。第一は常に諸仏を念ずる、第二は如来を供養する、第三は世尊を讃歎する、第四は仏の形像を作って功德を修める、第五は諸々の功德を廻向し往生を願う、第六は心の弱さや恐れを克服する、第七はひたすら精進する、第八

問曰、不具八法、得生佛前、不離佛不。

①⑦底欠損①⑦宝

答曰、得生不疑①⑦。何以得知。

「疑」

如佛說寶雲經時、亦明十行具足、得生淨土、常不離佛。時有除蓋障菩薩白佛、不具十行、得生已不。佛言、得生。但能十行之中、一行具足無闕、餘之九行悉名清淨。勿致疑也。

①⑧底「堅陀」①⑧元

①⑧「緊那」

又大樹緊那①⑧羅王經云、菩薩行四種法、常不離佛前。何等爲四。一者、自脩善法兼勸衆生、皆作往生見如來意。二者、自勸勸他、樂聞正法。三者、自勸勸他、發菩提心。四者、一向專志行念佛三昧。具此四行、一切生處常在佛前、不離諸佛。

は仏の正しい智慧を求めることである。また仏は海龍王に告げた。〈あらゆる衆生は、この八つの法門を具えたならば、常に仏と離れることはないのである〉⁽²⁷⁾と。

問う。この八つの教えを具えずして、仏前に生まれて仏と離れないということがあるだろうか。

答える。「具えなくとも」仏前に生まれることができるということとは疑いようがない。どうして、それがわかるのだろうか。

釈尊が『宝雲經』を説示した時にも、十行を具えたならば、淨土に生まれることができ、常に仏から離れることがないことを明らかにしている。すなわち「ある時、除蓋障菩薩は、釈尊に対して〈十行を具えなくても淨土に生まれることができるのでしょうか〉と申し上げた。仏は〈淨土に生まれることができる。十行の中で一行を具えて欠けなければ、その他の九行はことごとく清淨となるのだ。②⑧このことを疑ってはならない〉と述べた」⁽²⁹⁾とある通りである。

また『大樹緊那羅王經』には以下のように説かれている。すなわち「菩薩は四種の行法を行じ、常に仏の面前から離れることがない。何を四種とするのかと言えば、第一には、自ら善法を修めて、衆生にも勧め、みな共に往生して如来にまみえようと思うことである。第二には、自ら行じて他者を教化し、共に正法を聞く」と願うことである。第三には、自ら行じて他者を教化し、共々

又經云、佛說菩薩行法有三十二器。何者。布施是大富器、忍辱是端正器、持戒是聖身器、五逆不孝是刀山、劍樹、灌湯器。發菩提心是成佛器、常能念佛往生淨土是見佛器。

略舉六門、餘者不述。聖教既爾、行者願生、何不常念佛也。

又依月燈三昧經云、
念佛相好及德行 能使諸根不亂動
心無迷惑與法合 得聞得智如大海
智者住於是三昧 攝念行於經行所
能見千億諸如來 亦值無量恒沙佛

に菩提心を発そうとすることである。第四には、ひたすら専心して念仏三昧を行うことである。この四種の行法を具えたならば、どこに生まれたとしても、常に仏の面前にあって、諸仏と離れることがないのである⁽³⁰⁾と。

また同経には以下のように説かれている。「仏は菩薩の修行法（因）と、それによって得られる三十二の器量（果）を説いた。それは何であろうか。布施行は大富を得る人になる。忍辱行は身心が正しい人になる。持戒行は清浄の身の人になる。五逆や不孝は、刀山、劍樹、釜茹といった地獄の苦しみを受ける人になる⁽³¹⁾。菩提心を発すのは仏となる人になる。常に念仏し、浄土に往生する〔ことを願う〕のは、見仏する人になる⁽³²⁾と。

ここでは三十二の修行法を省略し、六つだけを挙げて、その他については述べないで置く。聖教の説示はすでに見た通りであり、行者が往生を願うならば、どうして常に念仏しないでいられるだろうか。

また『月灯三昧経』に依ると以下のように説かれている。

「仏のお身体の特徴や徳行を念じて
六根が乱れないようにし
迷いや疑惑を無くし、仏の教法と合致すれば
〔教えを〕聞き智慧が得られることは、大海のようである
智者がこの念仏三昧〔の境地に〕住し

行道するところで精神集中したならば
千億もの如来を見ることができ

また数えきれないほどの仏たちに値うことができる」と。⁽³³⁾

第三節には、「問答を通して解釈し、念仏三昧に種々の利益があることを明らかにする」とは、これには五つの問答がある。

第一に問う。常に念仏三昧を修せよというが、それ以外の三昧を修めなくともよいということなのだろうか。

答える。今、常に念仏三昧を修することを述べたのは、他の三昧を行じなくてもよいと言っている訳ではない。ただ念仏三昧を行ずることは〔諸経において〕多く説いているので、常に念仏せよと言ったまでであり、全く他の三昧を行じなくてもよいと言っているのではない。⁽³⁴⁾

第二に問う。常に念仏三昧を修するように勧めるが、〔念仏三昧と〕その他の三昧とは勝劣があるのだろうか。

答える。念仏三昧の勝れたありさまは思いも及ばない。では、どのようにしてこれを知るのでろうか。

『大智度論』には以下のように説かれている。「念仏三昧以外の三昧は、三昧ではないということはない。なぜかと言うと、ある三昧は貪欲を断除できるが、瞋恚や愚痴を断除することができない。ある三昧は瞋恚を断除できるが、愚痴や貪欲を断除すること

第三問答解釋、顯念佛三昧有種種利益。有其五番。

第一問曰、今云常脩念佛三昧、仍不行餘三昧也。

答曰、今言常念、亦不言不行餘三昧、但行念佛三昧多故、故言常念、非謂全不行餘三昧也。

第二問曰、若勸常脩念佛三昧者、與餘三昧能有階降以不。

答曰、念佛三昧勝相不可思議。此云何知。

如摩訶衍中說云、諸餘三昧、非不三昧。何以故。或有三昧、但能除貪、不能除瞋癡。或有三昧、但能除瞋、不能除癡貪。或有三昧、但能除癡、不能除瞋。或有三昧、但能除現在障、不能除過去未來一切諸障。

若能常脩念佛三昧、無問現在過去未來、一切諸障悉皆除也。

第三問曰、念佛三昧既能除障、得福利大者、未審亦能資益行者、使延年益壽以不。

①9底「第」元宝
「弟」
②0底「第」元宝
「弟」

答曰、必得。何者、如惟無三昧經云、有兄弟①9二人、兄信因果、弟②0無信心。而能善解相法。因其鏡中自見面上死相已現、不過七日。

時有智者、教往問佛。佛時報云、七日不虛。若能一心念佛、修戒②1、或得度難。

②1底「戒修」元宝
「修戒」

尋即依教繫念。時至六日即有二鬼來取。聞其念佛之聲、竟無能前進。還告閻羅。閻羅王索簿、簿已注云、由持戒、念佛功德、生第三炎天。

ができない。ある三昧は愚痴を断除できるが、瞋恚を断除することができない。ある三昧は現在の煩惱を断除できるが、過去や未来の全ての煩惱を断除することができない。もし常に念仏三昧を修したならば、現在・過去・未来を問うことなく、全ての煩惱を断除することができる⁽³⁵⁾」と。

第三に問う。念仏三昧は煩惱を断除し、福德を得る利益が大きいというのは、まだ承服していない。行者を助け利益して、寿命を延ばすことができるのであろうか。

答える。必ず「利益を」得ることができる。どうしてかと言うと、『惟無三昧經』に説かれている通りである。すなわち「兄弟二人がおり、兄は因果を信じていたが、弟には因果を信じる心が無かった。しかし弟は人相を占う法に通じていた。鏡に映した自らの顔に七日以内に死ぬ相が現れているのを見た。

その時、智者がおり、仏のもとに行って教えを請うように勧めた。仏はその時、「七日の間に死ぬというのは確実である。〔ただ〕もし一心に念仏し、戒を持つならば、あるいはこの災難から逃れることができるかもしれない」と答えた。

「弟は」すぐさまその教えによって念じ続けた。六日が経つと二人の鬼が「命を」取りに来た。「鬼は弟の称える」念仏の声を聞くと、全く前進することができなかった。「鬼は」閻羅王のもとに帰って事の次第を報告した。閻羅王が名簿を調べたところ、そ

又譬喻經中、有一長者、不信罪福、年已五十。忽夜夢見、殺鬼賣符來、欲取之不過十日。其人眠覺、惶怖非常。

至明、求覓相師占夢。師作卦兆云、有殺鬼必欲相害、不過十日。其人惶怖倍常、詣佛求請。

佛時報云、若欲攘此、從今已去、專意念佛、持戒、燒香、燃燈、懸繪幡蓋、信向三寶、可勉此死。

即依此法專心信向。殺鬼到門、見脩功德、遂不能害、鬼即走去。其人緣斯功德、壽滿百年、死得生天。

復有一長者、名曰執持、退戒還佛、現被惡鬼打之。

こには持戒と念仏の功德により第三炎天（夜摩天）に生じるとすでに注記されていたのである⁽³⁶⁾と。

また『譬喻經』の中にも以下のように説かれている。すなわち「ある長者が罪福の因縁を信じることなく、五十歳まで年齢を重ねてきた。しかしある夜、殺鬼（羅刹鬼）が符を持ってきて、十日以内に命を奪おうとする夢を見た。長者は目が覚めて大いに恐怖した。

明け方になり占師を探し求めて夢を占わせた。占師が占って言うには「殺鬼がもしも「長者を」殺そうとするならば、それは十日以内のことであろう」と。長者は更に恐怖し、仏のところに詣でて「免れるための方法を」求めた。

そこで仏は「もしこの災いを攘いたければ、ただ今より心を一つにして念仏、持戒、焼香し、灯明を灯し、絹の幡や蓋を懸けて、三宝に信心を傾けたならば、この死を免れることができる」と答えた。

そうして「長者は」この教えによって心を一つにして、信心を傾けた。殺鬼は門に現れたものの、功德を修している様を見て、遂に殺害できずにすぐさま去っていった。この人はこのような功德により、寿命は百年に達し、命尽きて天界に生まれた⁽³⁷⁾」。

また一方、「執持という長者は、戒律を放棄して、仏に返したた

第四問曰、此念佛三昧但能對治諸障、唯招世報、亦能遠感出世無上菩提以不。

答曰、必得。何者。如華嚴經十地品云、始從初地、乃至十地、於一一地中、皆說入地加行道、地滿功德、已不住道訖、即皆結云、是諸菩薩雖脩餘行、皆不離念佛念法念僧、上妙樂具供養三寶。

以斯文證得知、諸菩薩等乃至上地、常學念佛、念法、念僧、方能成就無量行願、滿功德海。何況二乘、凡夫求生淨土、不學念佛也。

何以故。此念佛三昧即具一切四攝、六度、通行、通伴故。

めに、現世で悪鬼に打たれることになった⁽³⁸⁾と。

第四に問う。この念仏三昧はただ諸々の煩惱を断ち、この世における果報を招くだけではなく、遠い未来世においてこの上ない菩提を得ることができるのだろうか。

答える。必ず得ることができる。なぜかと言えば、『大方広仏華嚴經』の「十地品」に説かれている。すなわち、「始めの初地より十地までの、それぞれの地位において、みな次の地に入るための準備的修行と、その地を成就した功德と利益、次の地に進むことを説きおわって、それぞれ最後にこの諸々の菩薩は、その他の行を修めるとは言っても、念仏、念法、念僧を離れることなく、最上の品物をもって三宝に供養する⁽³⁹⁾」と説いているのである。

この経文を証拠として知ることができる。諸々の菩薩は上地の菩薩に至るまで常に念仏、念法、念僧を修めることで、数限りない修行と誓願を成就し、海のような大きな功德を満足することができる。ましてや二乗や凡夫が、浄土に生まれるのを求めるのに、念仏を修めずにいられようか。

どうしてかと言うと、この念仏三昧は一切の四摂法、六波羅蜜をそなえており、全てに通じる行であり、全ての行をとまなうからである。

第五問、初地已上菩薩與佛同證真如之理、名生佛家。自能作佛濟運衆生、何須更學念佛三昧、願見佛也。

答曰、論其真如、廣大無邊、與虛空等、其量難知。譬如一大暗室、若燃一燈、二燈、其明難遍、猶爲闇也。漸至多燈、雖名大明、豈及日光。菩薩所證智、雖地地相望自有階降、豈得比佛如日明也。

第五大門中、有四番料簡。第一汎明脩道延促、欲令速獲不退。第二此彼禪觀比較勸往。第三此彼淨穢二境、亦名漏無漏比較。第四引聖教證成、勸後代生信求往。

第一汎明脩道延促者、就中有二。一明脩道延促、二問答解釋。

第五に問う。初地以上の菩薩が仏と同じように真如の理を証することを、仏の世界に生まれると名付ける。その菩薩が自ら仏と成つて衆生を救済できるというのに、どうして更に念仏三昧を修めて、仏にまみえたいと願うのだろうか。

答えよう。その真如〔の理〕を論ずると、広大で限量がなく、虚空と同じくその量は知り難い。たとえて言うならば、一つの大暗室において、一つ二つの灯火を燃したとして、その明るさは隅々まで行き渡らず、闇であることに変わりはない。次第に灯火を増やし、大灯明となったところでどうして日光に及ぶだろうか。菩薩が証するところの智慧は、自ら望むことで階位の上下があるとはいえ、⁽⁴⁰⁾どうして太陽の光のような仏と比較できるだろうか。

第五章のなかを四節に分類する。第一節には、仏道修行の時間の長短を明らかにして、速やかに不退転の境地を獲得させようと思う。第二節には、娑婆世界と極楽浄土において修める禅観を比べて往生を勧める。第三節には、娑婆世界の穢れた境界と極楽浄土の淨らかな境界は、〔それぞれ〕煩惱のある世界とない世界と名づけられ、両者を比較して〔往生を勧める〕。第四節には、聖教によつて証明して、後代〔の衆生〕に信心をおこし、往生することを求めるように勧める。

第一節に、「仏道修行の時間の長短を明らかにする」というのは、その中に二つある。一つには仏道修行の時間の長短を明らかにし、

明延促者、但一切衆生、莫不厭苦求樂、畏縛求解。皆早證無上菩提者、先須發菩提心爲首。此心難識難起。縱令發得此心、依經終須脩十種行。謂、信、進、念、戒、定、惠、捨、護法、發願、迴向、進詣菩提。

②②底「常令」元
③「當今」

然脩道之身、相續不絶、逕一萬劫始證不退位。當今②②凡夫、現名信想輕毛、亦曰假名、亦名不定聚、亦名外凡夫、未出火宅。

②③底欠損元③

何以得知。據菩薩瓔珞經、具辨入道行位法爾。故名難行道。又来但以、一劫之中受身生死、尚不可按知。況一萬劫中徒受痛燒。若能明信佛經、願生淨土、隨壽長短、一形即至、位階不退。與此脩道一萬劫齊功②③。諸佛子等、何不思量、不捨難求易也。

「功」

二つには問答を設けて解釈する。

〔一つには、仏道修行の〕時間の長短を明らかにするというのは、苦を厭い樂を求め、煩惱の束縛を恐れ解脱を求めないという者は一人としていない。速やかにこの上ない覺りを得ようとする者はみな、まず必ず菩提心を發することを第一としなければならない。〔ただし〕この心は認識しがたくて發しがたい。たとえ發したとしても、經典によって最後には十種の行、つまり信・進・念・戒・定・慧・捨・護法・發願・迴向を修めること④によって、進んで覺りに至らなければならないからである。

したがって、仏道修行の身を相續していけば、一万劫を経過して初めて不退轉の境地に達するのである。〔ところが〕今の時代の凡夫は、現実には信想輕毛、假名、不定聚、外凡夫と呼ばれ、〔あたかも〕火に焼かれている家（三界）から脱していないようなものである④。

どうしてそれを知ることができるのか。『菩薩瓔珞本業經』では、仏道に入ってから修行の位は道理によつて段階的に進んでいくことを余すことなく説いている④。だから「これを」難行道というさらに考えてみれば、一劫の中で受けた輪廻の身でさえ数えることができない。ましてや一万劫の中で「どれだけ」むだに焼けるような苦しみを受けただろうか。ところが明らかに仏の教えを信じて、淨土に往生したいと願うならば、寿命の長短に関わらず、

如俱舍論中、亦明難行易行二種之道。難行者、如論說云、於三大阿僧祇劫、一一劫中皆具福智資糧六波羅蜜一切諸行、一一行業皆有百萬難行之道、始竟一位。是難行道也。

易行道者、即彼論云、若由別有方便、有解脫者、名易行道也。今既勸歸極樂、一切行業悉迴向彼。但^{②④}能專至、壽盡必生。得生彼國、即究竟清涼。豈可名易行之道。須知此意也。

②④底 欠損 ㊦ ㊧
「但」

二問曰、既言願往生淨土、隨此壽盡即得往生者、有聖教證不。

答曰、有七番。皆引經論證成。

この生涯を終えて淨土に至り、不退転の境地に達することができ。これは一万劫に渡って仏道を修行した功德と同じである。諸々の仏弟子等よ。どうして考えもしないで、難行を捨てて易行を求めないのか。

『阿毘達磨俱舍釈論』の中に、また難行・易行の二種の道を明らかにしている。^{④④}難行とは、以下のように説かれている。「三大阿僧祇劫の一々の劫の中で、みな福德・智慧の功德である六波羅蜜などの一切の諸行を具えるとして、その一々の行業にみな百万の難行を修めて、初めて一つの位(覺り)を極めるのである。これが難行道である」^{④⑤}と。

易行道とは、『阿毘達磨俱舍釈論』に「もし特別の手立てによつて、解脫することができたらば」とあるのは易行道である。^{④⑥}今すでに極樂を依り所とし、一切の行をすべて淨土往生に回向することを勧める。もしそれをひたすら行つて寿命が尽きれば必ず往生する。極樂淨土に往生することができたならば、ついに覺りを得るのである。どうして「これを」易行道と呼ばずにおれようか。必ずこの意味を知るべきである。

二つには、問う。淨土に往生したいと願つたならば、この寿命が尽きて、往生を得るとするのは、仏の教えにその証拠があるのか。答える。証拠は七つある。みな經論を引用して証明しよう。

②⑤底「心心」元
③「心」

一依大經云。佛告阿難。其有衆生、欲於今世見無量壽佛者、應發無上菩提之心②⑤、脩行功德願生彼國、即得往生。

故大經讚云。

若聞阿彌陀德號 歡喜讚仰心歸依
下至一念得大利 則爲具足功德寶
設滿大千世界火 亦應直過聞佛名
聞阿彌陀不復退 是故至心稽首禮

二依觀經。九品之内皆言、臨終正念、即得往生。

②⑥底「然」元
「能」
②⑦底欠損元
「攝」

三依起信論云。教諸衆生、勸觀眞如平等一實。亦有始發意菩薩、其心軟弱、自謂不能②⑥常值諸佛、親承供養、意欲退者、當知、如來有勝方便攝②⑦護信心。謂以專意念佛因縁、隨願往生。以常見佛故、永離惡道。

一つに『無量壽經』によると、「仏は阿難に告げられた。この世で無量壽仏にまみえたいと思う者は、この上ない覺りを求める心を發し、功德を修めて極樂往生しようと願ったならば、往生することができる^{④⑦}」という。

したがって『讚阿彌陀仏偈』には以下のように説かれている。

「もし阿彌陀仏の仏德のおさまった名号を聞いて
歡喜し讚めたたえ歸依すれば
わずか一念でも大いなる利益を得る
〔それは名号に〕功德の宝が具わっているからである
たとえ大千世界に火が満ちていようとも
すぐに通り過ぎて仏名を聞け
阿彌陀仏〔の名号〕を聞けば、退轉することはない
だから心から頭をたれて礼拝し奉る^{④⑧}」と。

二つに『觀無量壽經』によると、九品の中ですべてに説いている。
「臨終に正念ならば、すぐに往生できる^{④⑨}」と。

三つに『大乘起信論』によると以下のように説かれている。
「諸々の衆生に、眞如は差別を超えた唯一絶対のすがたであることを觀想しなさいと勧める。また初發意の菩薩が、その心が軟弱で常に諸仏に遇つて、まごころ込めた供養ができないと思い、心が退轉しそうになるならば、如來には勝れた方便があつて〔我われの〕信心をよく守護して下さいと知りなさい。つまり、心から

②⑧底欠損元金
「往」

四依鼓音陀羅尼經云。爾時世尊、告諸比丘、我當爲汝演說。西方安樂世界今現有佛、號阿彌陀。若有四衆、能正受持彼佛名號、堅固其心憶念不忘、十日十夜除捨散亂、精勤脩習念佛三昧、若能令念念不絕、十日之中、必得見彼阿彌陀佛、皆得往②⑧生。

五依法鼓經云。若人臨終之時不能作念、但知彼方有佛作往生意、亦應往生。

六如十方隨願往生經云。若有臨終及死墮地獄、家內眷屬爲其亡者、念佛及轉誦齋福、亡者則出地獄往生淨土。況其現在自能脩念、何以不得往生者也。

是故彼經云。現在眷屬爲亡者追福、如餉遠人定得食也。

念ずることにより願い通りに往生する。こうして常に仏にまみえることによって、永久に惡道から離れるのである^{③⑨}と。

四つに『阿彌陀鼓音声王陀羅尼經』によると以下のように説かれている。「その時世尊は、諸々の比丘に告げられた。私はお前のために教えを説こう。西方安樂世界に今、現に仏がおられ、阿彌陀という。もし四衆が阿彌陀仏の名号を受持して、その心を堅固にし、憶念して忘れず、十日間の散亂を除き、つとめ励んで念仏三昧を修習し、常に念じて中断しなければ、十日間のうちに必ず阿彌陀仏をまみえることができ、みな往生することができる^{④①}」と。

五つに『大法鼓經』によると、「臨終の時に「阿彌陀仏を」念じることができれば、ただ西方に仏がおられると知って、往生したいと思うだけでも、往生するにちがいない^{④②}」と説かれている。六つに『灌頂隨願往生十方淨土經』には以下のように説かれている。「もし臨終を迎え、死して地獄に墮ち、家族がその亡者のために、念仏および読誦によって福德を行うならば、亡者は地獄から逃れ出て淨土に往生する。まして生前中に自ら念仏を修めるならば、どうして往生できないことがあるか^{④③}」と。

だから同経には、「存命中の家族が亡者のために追善供養することとは、遠くにいる人に食事を贈れば必ずそれを食べる^{④④}ことができる^{④⑤}と同じ「ように往生することができる^{④⑥}」という。

第七廣引諸經證成。如大法鼓經說。若善男子善女人、常能繫意稱念諸佛名號者、十方諸佛一切賢聖常見此人、如現目前。是故此經名大法鼓。當知、此人十方淨土隨願往生。

又大悲經云。云何名爲大悲。若專念佛相續不斷者、隨其命終定生安樂。若能展轉相勸行念佛者、當知、此等悉名行大悲人也。

是故涅槃經云。佛告大王、假令開大庫藏、一月之中布施一切衆生。所得功德不如有人稱佛一口。功德過前不可校量。

又增一阿含經云。佛告阿難。其有衆生、供養一閻浮提人、衣服、飲食、臥具、湯藥。所有功德寧爲多不。阿難白佛言。世尊甚多甚多。不可校量。佛告阿難。若有衆生、善心相續稱佛名號、如一搆牛乳頃、所得

七つに諸々の經典を引用して証明する。『大法鼓經』には以下のように説かれている。「善男子・善女人が常に心をかけて、諸仏の名号を称えれば、十方の諸仏やあらゆる賢者と聖者が常にこの人を見て、目の前に現れているようになる。だからこの經を『大法鼓經』という。この人は十方の淨土に願い通りに往生すると知るべきである⁽⁵⁵⁾」と。

また『大悲經』には、「どうして大悲とするのか。もしひたすら念仏を相續して中断しなければ、その命が終わる時に必ず安樂(国)に往生する。もし次々に人々に勧めては念仏させるならば、これらはみな大悲を行ずる人であると知るべきである⁽⁵⁶⁾」と説かれている。

だから『大般涅槃經』には、「仏は〔阿闍世〕大王に告げられた。〈たとえ大きな蔵を開いて、一月の間、一切衆生に布施しようとも、それによつて得られる功德は一度仏を称える功德にも及ばない。〔仏を一度称える〕功德は布施の功德と比べることができないほど大きいのである⁽⁵⁷⁾〉」という。

また『増一阿含經』には以下のように説かれている。「仏は阿難に告げられた。〔閻浮提の人に衣服・飲食・臥具・湯藥を供養するとしよう。それらの功德は果たして多いだろうか〕。阿難は仏に申しあげた。〔世尊よ、とても多くて比べることができません〕。

功德過上不可量。無有能量者。

大品經云。若人散心念佛、乃至畢苦、其福不盡。若人散花念佛、乃至畢苦、其福不盡。故知、念佛利大不可思議也。

十往生經、諸大乘經等、竝有文證。不可具引也。

第二次明此彼禪觀比校勸往生者、但此方穢境、乱想難入。就令²⁹脩得、唯獲事定、多喜味染。又復但能伏業、報生上界、壽盡³⁰多退。是故智度論云。

「令」²⁹底「念」元宝
「盡」³⁰底なし元宝

多聞持戒禪 未得無漏法
雖有此功德 是事未可信。

仏は阿難に告げられた。へもし善き心を維持して仏の名号を称えることが牛の乳を一度だけ搾る程度の短い時間であるとしても、それによつて得られる功德は先の布施の功德を超えていることは量ることができない。「また」量れる者もない⁵⁸」と。

『摩訶般若波羅蜜經』には以下のように説かれている。「心が散乱したままで念仏するとしても、「生死の」苦が終わるまでその福德は尽きることがない。また花を散らして念仏するならば、「生死の」苦が終わるまでその福德は尽きることがない⁵⁹」と。したがって「どちらにせよ」念仏の利益は大きく不可思議であることがわかる。

『十往生阿弥陀仏国經』や「他の」諸々の大乘經等に、「浄土に往生を願う者が命が尽きてすぐさま往生を得るという」証拠の文はあるが、ここにそのすべてを引用することはできない。

第二節に、「娑婆世界と極樂浄土において修める禪觀を比べて、往生を勧めることを明らかにする」というのは、この娑婆世界は穢れた世界であるため、乱れた心では「禪定に」入りがたい。たとえ「禪定を」修めることができたとしても、具体的なものをとらえるだけで、執着を楽しむ者が多い。また業を抑えて、果報として上界に生じたとしても、「上界での」寿命が尽きたならば多くの者は退転するのである。だから『大智度論』には、「多聞と持戒と禪と」を修めるとしても」

若欲向西脩習、事境光淨、定觀易成、除罪多劫、永定速進、究竟清涼。如大經廣說。

問曰、若西方境界勝、可爲禪定感、此界色天弱、不應爲禪定招。

答曰、若論脩定因、該通於彼此。然彼界位是不退、并有他力持。是故說爲勝。此所雖復脩定剋、但有自分因、闕無他力攝。業盡不免退。就此說不如。

第三據此彼淨穢二境、亦名漏無漏者、若論此處境界、唯有三塗、岳坑山澗、沙鹵棘刺、水旱暴風、惡觸、

まだ無漏の法を得ていなければ
この功德はあるといつても
信じることはできない^⑥という。

「しかし」もし西方において禪定を修めようと思えば、極樂浄土の境界は清浄な光明によつて「照らされ」、禪觀を成就しやすく、多劫にわたる「生死の」罪を除き、永遠の禪定が速やかに完成に向かい、ついには覺りが得られる。詳しくは『無量寿經』に説いてある^⑥。

問う。西方の境界は勝れており、そこで禪定を修めて果報を得るというならば、この欲界や色界は劣つた境界であつて、ここで禪定を修めても果報を招くことはないというのだろうか。

答える。もし禪定によつて「果報を得るといふ」因行そのものを論じるならば、極樂浄土と娑婆世界「のどちらでも得られると言ふ点では」共通している。しかし極樂浄土は不退轉の位であり、また他力のはたらきがある。だから勝れていると言える。この「娑婆」世界は禪定を修すことを成就したとしても、ただ自らの因行であるにすぎず、他力の助けに欠けている。「寿命の」業が尽きたならば退轉することは免れられない。これによつて「極樂浄土において修める禪觀には」及ばないと言ふのである。

第三節に、「娑婆世界の穢れた境界と極樂浄土の浄らかな境界は、「それぞれ」煩惱のある世界とない世界と名づけられる」とは、

③①底字体未詳①
③②「逐」

雷電礪、虎狼毒狩、怨賊惡子、荒亂破散、三災敗壞。語論正報、三毒八倒、憂悲嫉妬、多病短命、飢渴寒熱、常爲伺命害鬼之所追逐③①。深可穢惡、不可具說。故名有漏。深可厭也。

③②底「帝」元宝
③③底なし元宝
「入」

往生彼國勝者、據大經云、十方人天但生彼國者、莫不皆獲種種利益也。何者。一生彼國者、行則金蓮捧足、坐則寶座承軀。出則帝釋在前、入則梵王從後。一切聖衆與我親朋、阿彌陀佛爲我大師。寶樹寶林之下任意翱翔、八德池中遊神濯足、形則身同金色、壽則命與佛齊。學則衆門普進、止則二諦③②虛融。十方濟運則乘大神通、晏安暫時則坐三空門。遊則入③③八正之路、至則到大涅槃。一切衆生但至彼國者皆證此益。何不思量不速去也。

この娑婆世界について言えば、地獄や餓鬼や畜生、丘や洞穴と山や谷、塩分を含んだ砂地ととげやいばら、洪水やひでりと暴風、身に触れたら悪いもの、雷や稲妻と烈しいかずち、虎や狼と毒のある獣、害する賊と親不孝な子、飢饉と世の乱れ、火災や水災や風災による破滅がある。「また娑婆世界の」我々について言えば、貪瞋痴の三毒と凡夫の四顛倒（常・樂・我・淨）と声聞・縁覺の四顛倒の八倒、憂い悲しみと嫉妬、多病と短命、飢渴と寒熱があり、いつも伺命という「人の寿命を管理する」鬼神に追いまわされている。深く憎むべきであり、これを全部説きつくすことはできない。だから有漏という。心の底から厭うべきである。

極樂浄土に往生することが勝れているというのは、『無量寿經』によると以下のように説かれている。「十方の人天で極樂浄土に往生する者は、一人残らずみな種々の利益を得る。それは何か。ひとたび極樂浄土に往生する者は、歩く時は金蓮華が足を支え、坐る時は宝座が身体を受ける。〔極樂浄土を〕出れば帝釈天が前にいて、入れば梵天が後ろに付き添う。③③一切の聖衆は親しい友であり、阿弥陀仏は我が偉大なる師である。宝樹や宝林のもとでは心の趣くままに往来し、八功德水の池の中では心を楽しませて足を洗う。姿は〔仏と〕同じように金色であり、寿命は仏と等しい。修行する時は諸々の教えをみな修め、禪定をする時は真俗二諦が融通自在となる。十方をめぐる衆生を救おうとする時は大神通力を用い、極樂浄土に入ってわずかな間でも安らかにしている時

第四引聖教證成、勸後代生信求願往者、依觀佛三昧經云。爾時會中有十方諸佛、各於華臺中結跏趺坐於空中現。東方善德如來爲首、告大衆言。汝等當知。我念過去無量世、時有佛。名寶威德上王。彼佛出時、亦如今日說三乘法。彼佛滅後末世之中有一比丘、將弟子九人、往詣佛塔、禮拜佛像。見一寶像嚴顯可觀。觀已敬禮、目諦觀之、各說一偈、用爲讚嘆、隨壽脩短、各自命終。既命終已即生佛前、從此已後、恒得值遇無量諸佛、於諸佛所、廣脩梵行、得念佛三昧海。既得此已、諸佛現前即與授記。於十方面、隨意作佛。

は、空・無相・無願の三解脱門の境地にいる。十方に趣く時は八正道をおさめ、浄土に戻る時に大涅槃に入るのである」と。⁶⁴一切の衆生で極楽浄土に往生する者は、みなこの利益を体得する。どうしてよく考えもせず、速やかに往生しようとしないのであるうか。

第四節に、「聖教によつて証明して、後代〔の衆生〕に信心をおこし、往生することを求めるように勧める」というのは、『觀佛三昧海經』によると以下のように説いている。「その時、会座の中に十方の諸仏がいて、それぞれ蓮華の台に結跏趺坐したまま空中に出現された。東方の善徳如来が代表になって大衆に告げられた。へあなたたちはよく知りなさい。私は以下のことを覚えてゐる。計り知れないほどの過去世に宝威徳上王という仏がおられた。その仏が世に出られた時に、今日のように三乗の法を説かれていた。その仏の滅後、末法の世の中に一人の比丘がいて、弟子九人を連れて、仏像を礼拝しようと仏塔に参詣した。そこに嚴かで觀想に値する一体の宝像を見つけた。それを觀想しおわつて敬い礼拝し、はつきりとこれを觀じた。〔比丘たちは〕それぞれ一偈を説いて讚歎し、寿命の長短にしたがつてそれぞれ命を終えた。命を終えた後に仏前に生まれ、それからというものの、いつも無量の諸仏に遇うことができ、諸仏の所において、余すことなく清らかな行を修めて念仏三昧を得た。これを得てから諸仏の目の前で記別を与えられ、十方世界において、それぞれが思い通りに仏となった。

東方善德佛者、即我身是。自餘九方諸佛者、即是本昔弟子九人是。十方^{③④}佛世尊、因由禮塔一偈讚故、得成爲佛。豈異人乎、我等十方佛是。時十方諸佛從空而下。放千光明、顯現色身白毫相光、各各皆坐釋迦佛牀。告阿難言、汝師和上、釋迦文佛無數精進、百千苦行、求佛智惠、報得是身、今爲汝說。汝持佛語、爲未來世天龍大衆四部弟子、說觀佛相好及念佛三昧。說是語已、然後問訊釋迦文佛。問訊訖已、各還本國。

第六大門中有三番料簡。第一、十方淨土共來比較。第二、義推。第三、辨經住滅。

第一、十方淨土共來比較者、有其三番。一、如隨願往生經云、十方佛國皆悉嚴淨。經云、隨願竝得往生。雖然悉不如西方無量壽國。何意如此、但阿彌陀佛與觀音大勢、先發心時、從此界去、於此衆生偏是有緣。是故釋迦處處歎歸。

その東方の善徳仏とは私である。そのほかの九方の諸仏は、かつての九人の弟子である。十方の諸仏は「かつて」塔を礼拝し、一偈を説いて讃歎したことによって仏になることができた。これをどうして別人といえようか、それこそ私たち十方の諸仏である」と。この時に十方の諸仏は空から降りて、千の光明を放ち、身の白毫相の光を現して、それぞれ釈迦仏の腰かけに座って、阿難に告げた。「あなたの師である釈迦仏は数え切れないほどの精進、百千の苦行によって、仏の智慧を求め、報われてこの身となり、今あなたのために「教えを」説かれているのです。あなたは仏の言葉を忘れず、未来世の天龍、大衆、四部の弟子のために、仏の相好を観ずる〔観仏三昧〕と念仏三昧を説きなさい」と。このように説きおわって、「十方諸仏は」釈迦仏に挨拶し、その後それぞれ本国に還られたのである⁽⁶⁵⁾と。

第六章の中に三つの分類がある。第一節では十方淨土と〔西方淨土〕とを比較する。第二節では、教理の面から検討する。第三節では經典の残留と滅尽について解釈する。

第一節の「十方淨土と〔西方淨土〕との比較」には三つの項目がある。第一の項目は、『灌頂隨願往生十方淨土經』に「十方の仏国土はみな飾られて淨らかである」、また「その願いによって誰もが往生できる。しかし、どの淨土であっても西方の無量寿仏の国土には及ばない⁽⁶⁶⁾」と説かれている。どうしてなのかと言うと、阿弥陀仏と觀音菩薩、勢至菩薩が、先に発心してこの娑婆世界を

二、據大經、法藏菩薩因中、於世饒王佛所、具發弘願取諸淨土。時佛爲說二百一十億諸佛刹土、天人善惡、國土精麁、悉現與之。於時法藏菩薩願取西方。成佛今現在彼。是二證也。

③⑤「臺」
③⑥「豪」
③⑦「元」
③⑧「宝」

三、依此觀經中、韋提夫人復請淨土、如來光臺③⑤、爲現十方一切淨土。韋提夫人白佛言、此諸佛土雖復清淨皆有光明、我今樂生極樂世界阿彌陀佛所。是其三證。故知諸淨土中、安樂最勝也。

第二、義推者、問曰、何故要須面向西坐禮念觀者。

答曰、以閻浮提之日出處名生、沒處名死。藉於死地、

去つたので、この世界の衆生とはとりわけ縁があるからである。^{⑥7}
だから釈尊は種々の經典で「西方淨土を」讚歎しているのである。
第二の項目は、『無量壽經』による。すなわち「法藏菩薩は覺りを得る前、世饒王仏（世自在王仏）のもとで、誓願を發して諸々の淨土〔の特質〕を取捨選択しようとした。その時、世饒王仏は法藏菩薩のために二百十億の諸仏の国土、天神や人の善惡、国土の優劣を説き、それらの有様をみな現わした。この時、法藏菩薩は西方淨土を成就するための修行を選択することを願つた。そして成仏して今現在もかの淨土に在している」と。これが第二の証である。

第三の項目としては、この『觀無量壽經』による。すなわち「韋提希夫人は更に淨土〔の觀想方法を釈尊に〕請い、それに対して釈尊は光台に十方のすべての淨土を現して示した。韋提希夫人は釈尊に「これらの諸仏の国土は清淨で、みな光明を放っているけれども、今や私は、極樂世界の阿彌陀仏のもとに往生したいと願います」と申し上げた」と。これが第三の証拠である。だから諸々の淨土の中で、安樂世界が最も勝れているとわかるのである。
第二節の「教理の面から検討する」とは、問う、どうして必ず顔を西方に向けて坐し、礼拝、念仏、觀察しなければならないのだろうか。

答える。閻浮提の日の出ずるところを生といい、日の没するところ

③⑥「甚」⑤⑥
「其」

神明趣入、其③⑥相助便。是故法藏菩薩願成佛在西、悲接衆生。坐觀禮念等面向佛者、是隨世禮儀。若是聖人得飛報自在、不辨方所。但凡夫之人身心相隨、若向餘方、西往必難。

是故智度論云、有一比丘、康存之日誦阿彌陀仏經、及念般若波羅蜜。臨命終時告弟子言、阿彌陀佛與諸聖衆今在我前、合掌歸依、須臾捨命。於是弟子依火葬法、以火焚屍。一切燒盡、唯有舌根一種與本不異。遂即收取起塔供養。

③⑦「垂」⑤⑥
「乘」

龍樹菩薩釋云、誦阿彌陀仏經故、是以垂③⑦終佛自來迎。念般若波羅蜜故、所以舌根不盡。以斯文證、故知一切行業但能迴向、無不往也。

ろを死という。死後の世界（西方）に対して、思いを注げば往生の助けになる。だから法藏菩薩は成仏して西方にあって慈悲によつて衆生を救うことを願ったのである。「坐し、觀察、礼拝、念仏などをする時には、仏に顔を向ける」というのは、世間の礼儀に随ったことである。⁽⁷⁰⁾もし聖者が神通力を得たならば自在に趣くことができるのであり、方角を問うことはない。しかし凡夫の身と心は一つになっているので、もし他の方角に「顔を」向けたならば、「心も他の方角に向いてしまうので」西方に往生することは極めて難しいのである。

このような次第で『大智度論』には、以下のように説かれている。すなわち「健やかな時には『阿彌陀經』を誦誦し、般若波羅蜜〔經〕を誦念⁽⁷¹⁾していた比丘が命終に際して弟子に、（阿彌陀仏が諸々の聖者と共に私の眼前におられる」と告げ、合掌して阿彌陀仏に帰依するや、ほどなくして命を終えた。そこで弟子は火葬の定めに則つて遺体を焼いた。全て焼き尽くしたが、ただ舌だけが生前のまま残っていたのである。そこでその舌を拾いあげて塔を建立して供養した⁽⁷²⁾」と。

龍樹菩薩は、これを解説して「『阿彌陀經』を誦誦していたことにより、命終時に仏が自らが来迎され、般若波羅蜜〔經〕を誦念していたことによつて、舌が焼き尽くされなかったのである⁽⁷³⁾」と述べている。この文を証拠にすることで、あらゆる行業は「その功德を」振り向けたならば、必ずや「西方に」往生できるという

③⑧底「從」元宝

「縦」

故須彌四域經云、天地初開之時、未有日、月、星辰、縦③⑧有天人來下、但用項光照用。爾時人民多生苦惱。於是阿彌陀佛遣二菩薩。一名寶應聲、二名寶吉祥、即伏羲、女媧是。此二菩薩共相籌議、向第七梵天上取其七寶、來至此界造日、月、星辰、二十八宿。以照天下、定其四時、春、秋、冬、夏。時二菩薩共相謂言、所以日、月、星辰、二十八宿西行者、一切諸天、人民盡共稽首阿彌陀佛。是以日月星辰、皆悉傾心向彼、故西流也。

③⑨底「感」元宝

「減」

第三、辨經住減者、謂釋迦牟尼佛一代正法五百年、像法一千年、末法一萬年、衆生減③⑨盡、諸經悉滅。如來悲哀痛燒衆生、特留此經、止住百年。以斯文證、故知彼國雖是淨土、然體通上下。知相無相、當生上位、凡夫火宅、一向乘相往生也。

ことがわかる。

だから『須彌四域經』には以下のように説かれている。すなわち「天地が初めてできた時、まだ太陽、月、星も無く、たとえ天人が来臨しても、それぞれが放つ後光によって照らし出すにすぎなかった。その時代の人々にはたくさんさんの苦悩があった。そこで阿弥陀仏は二菩薩を遣わした。一人は宝応声菩薩であり、もう一人は宝吉祥菩薩であって、この二人こそが伏羲と女媧である。この二菩薩は共に協議し合って、第七の梵天より七宝を取り、この世界に齎して太陽、月、星と二十八宿を造った。そうすることで世界は照らされ、春秋冬夏の四季が定まったのである。その時、二菩薩が語るには、(太陽、月、星と二十八宿が西へと運行するのは、あらゆる諸天や人々をして、みな阿弥陀仏に礼拝させるためである)と。このような理由で太陽、月、星は「彼らが」心を西方にかけるように西の方角へと運行してゆくのである。だから西流というのである⁽⁷⁴⁾と。

第三節の「經典の残留と滅尽について解釈する」というのは、釈迦牟尼仏がその生涯に説いた教えは、正法五百年、像法一千年、末法一万年、留まり、「それが過ぎると」「衆生の寿命は短くなり、諸々の經典もことごとく滅んでしまう。如來は「五つの」痛焼⁽⁷⁵⁾〔の苦しみ〕に苛まれる衆生を哀れんで、とりわけこの『無量寿經』が百年は留まるようにした⁽⁷⁶⁾」。この文を証拠とすることで、阿弥陀仏の国土は、淨土ではあるけれども、その本質は上位から

下位にまで通じていることがわかる。有相は実のところ無相であると体得した聖者は上位の浄土に往生し、凡夫のような火宅の世界の存在は有相を拠り所として往生するのである。⁽⁷⁾

註

(1) 道綽は菩提流支を「中国三蔵法師」や「中国大乗法師」と呼んでいる。また『統高僧伝』の曇鸞伝でも「行至洛下、逢中国三蔵菩提留支」(『大正蔵』第五〇巻、四七〇中)とある。ところが菩提流支の伝記の冒頭には、「菩提流支、魏言道希、北天竺人也。遍通三蔵」(『統高僧伝』巻一訳経篇、『大正蔵』第五〇巻、四二八上)とあるように、五天竺国の北天竺国の出身であることから、この「中国」とは五天竺国の「中天竺国」ではないことがわかる。通常、菩提流支の名前の前に冠されるのは、「元魏天竺三蔵」「元魏三蔵法師」「元魏北印度三蔵」「後魏天竺三蔵」「後魏北印度三蔵」が圧倒的に多く、「中国三蔵」が冠されるのは、わずかにこの『安樂集』『統高僧伝』そして『法苑珠林』(『大正蔵』第五三巻、三〇四中)のみである。東晋の釈道安はインドから遙か遠い自国である中華を自虐的に「辺国」や「異国」と呼んでいた。『陰持入経序』において「世不值仏、又処辺国。音殊俗異、規矩不同。又以愚量聖、難以逮也」(『出三蔵記集』巻六、『大正蔵』第五五巻、四五上)と述べ、また『十二門経序』でも「安宿不敏、生値仏後。又処異国、楷範多闕、仰希古烈、滯而未究。寤寐憂悸、有若疾首」(『出三蔵記集』巻六、『大正蔵』第五五巻、四六上)と述べている通りである。自分が生まれた中華を仏法に縁遠い国としてこのような「辺国」や「異国」と呼んで蔑んだのである。また大乘基は『瑜伽師地論』の注釈書『瑜伽師地論略纂』を著し、『瑜伽師地論』本文中の「処中国不生辺地」について、「依俗間釈、唯五印度名為中国。

中国之人、具正行故。余皆辺地。設少具行、多不具故。仏法所伝、唯中印度、名為中国。威儀礼則、順正理故」(『大正蔵』第四三巻、一〇六上)と解説している。俗間においては五天竺国のすべて、つまりインド全域を中国と呼んだり、また仏法が伝播した中インド(中天竺国)だけを中国と呼ぶと述べている。これらに準じて言うならば、『安樂集』における「中国三蔵法師」や「中国大乗法師」の中国とは、仏法の辺地・異国である中華に対するインドそのものを示していることがわかる。

(2) 「五翳」とは日月の光を障げる煙・雲・塵・霧・日食の五つのことを言う。『大般涅槃經』(曇無讖訳)巻二十五「光明遍照高貴徳王菩薩品」第十之五には、「善男子。譬如日月雖為烟塵雲霧及羅睺羅之所覆蔽。以是因縁、令諸衆生、不能得見。雖不可見日月之性終不與彼五翳和合」(『大正蔵』第十二巻、五一六下)とある。

(3) 「面牆」は『論語』「陽貨篇」に出る見識の乏しいことを指す語である。「子謂伯魚曰、女為周南召南矣乎。人而不為周南召南、其猶正面牆而立也與」

(4) 良忠『安樂集私記』(浄全一、七三六上)には、「二国慕仰とは魏と齊との二国なり」とある。迦才『浄土論』巻下、「第六引現得往生人相貌」の曇鸞伝には、「沙門曇鸞法師者、并洲汶水人也。魏末高齊之初猶在」(『大正蔵』第四七巻、九七下)とある。良忠は『浄土論』の記述によって、二国を魏と齊とした可能性がある。

(5) 『統高僧伝』巻六義解篇、曇鸞伝では「釋曇鸞、或爲辯」(『大正蔵』

第五〇巻、四七〇上」とあり、「曇鸞」と「曇鸞」の二説があるとしている。底本では「鸞」の字を採用している。

- (6) 六大徳に關しては、望月信亨の『支那浄土教理史』六四、六五頁（法藏館、一九四二年）に、慧龍は『統高僧伝』卷七に出る「道寵」、道場は『大智度論疏』卷二十四などに出る「道長」、大海は『統高僧伝』卷十二に出る「慧海」に比定できるのではないかと述べられている。また望月信亨以外の論攷を以下に挙げておく。佐々木功成「安樂集の六大徳について」（『真宗研究』第二巻、真宗学研究所、一九二七年）、服部仙順「六大徳相承説に就いて」（『浄土学』第八巻、大正大学浄土学研究会、一九三四年）、里道徳雄「地論宗北道派の成立と消長―道寵伝を中心とする一小見―」（『大倉山論集』第十四輯、大倉精神文化研究所、一九七九年）、牧田諦亮・直海玄哲・宮井里佳「道綽―その歴史像と浄土思想―」（藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏教の思想』第四巻、講談社、一九九五年）。

- (7) 良忠『安樂集私記』卷下には「後六就縁依相等者、後六中或明諸佛現在前、或明始終兩益、或明見彌陀已決得生行、或明念佛法王、或明念佛必見佛往生、或明往生八行。如是就別別縁、明念佛相、故云就縁依相等」（『浄全』一、七三六下）とある。

- (8) 『華首経』（鳩摩羅什訳）卷十「法門品」……「第三十四。堅意、如來所説、諸三昧門、為何者是。堅意、有一相三昧、有衆相三昧。一相三昧者、有菩薩聞某世界、有某如來現在説法、菩薩取某佛相以現在前。若坐道場得無上菩提。若轉法輪、若與大衆圍遶説法、取如是相、以不亂念守攝諸根、心不馳散專念一佛不捨是縁。亦是佛世界之相、而是菩薩於如來相及世界相了達無相。常如是行常如是觀不離是縁。是時佛像即現在前而為説法。菩薩爾時深生恭敬聽受是法。隨所信解若深若淺、轉加尊敬尊重如來。菩薩住是三昧聞説諸法皆壞敗相、聞已受持從三昧起、能為四衆演説是法。堅意、是名入一相三昧門。復次堅意、菩薩住是三昧、還能壞滅是佛相縁亦壞自身、以是壞相壞一切法、壞一切法故入一相三昧。從是三昧起能為四衆解説是法。堅意、是名為入一相三昧

門方便」（『大正蔵』第十六卷、二〇三下）。

- (9) 『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』（曼陀羅仙訳）卷下……「文殊師利言、世尊、云何名一行三昧。佛言、法界一相、繫縁法界、是名一行三昧。若善男子、善女人、欲入一行三昧、當先聞般若波羅蜜、如説修學、然後能入一行三昧。如法界縁、不退不壞、不思議、無礙無相。善男子、善女人、欲入一行三昧、應處空閑、捨諸亂意、不取相貌、繫心一佛、專稱名字。隨佛方所、端身正向、能於一佛念念相續、即是念中、能見過去、未來、現在諸佛。何以故。念一佛功德無量無邊、亦與無量諸佛功德無二、不思議佛法等無分別、皆乘一如、成最正覺、悉具無量功德、無量辯才。如是入一行三昧者、盡知恒沙諸佛法界無差別相」（『大正蔵』第八巻、七三一上）。

- (10) 『大般涅槃經』（曇無讖訳）卷十八の趣意文か。

- (11) 『大般涅槃經』（曇無讖訳）卷十八梵行品の本文では、「善男子、若男若女、能如是念仏者、若行若住、若坐若臥、若昼若夜、若明若闇、常得不離、見仏世尊」（『大正蔵』第十二巻、四六九下）とあるように、念仏する者はいつかなる時も仏を「見」という文意であるが、道綽はこの経文を引用する際に、仏が此人（念仏者）を「見」と意図的に主語を入れ替えている。仏は念仏者を見捨てないという、仏の救済のはたらきや慈悲を強調しようとしたものであろうか。

- (12) 『大般涅槃經』（曇無讖訳）卷十八「梵行品」第八之四……「善男子、若男若女、能如是念仏者、若行若住、若坐若臥、若晝若夜、若明若闇、常得不離、見佛世尊」（『大正蔵』第十二巻、四六九下）。『大般涅槃經』（曇無讖訳）卷二十一「光明遍照高貴徳王菩薩品」第十之二……「善男子、若有人能書寫是經、讀誦解説、為他敷演、思惟其義、當知是人、真我弟子、善受我教。是我所見、我之所念、是人諦知、我不涅槃。隨如是人、所住之處、若城邑聚落、山林曠野、房舍田宅、樓閣殿堂。我亦在中、常住不移、我於是人、常作受施」（『大正蔵』第十二巻、四九六下）。

- (13) 『觀無量壽經』（畺良耶舍訳）……「念佛衆生、攝取不捨」（『大正

藏』第十二卷、三四三中)。

- (14) 『觀世音菩薩授記經』(曇無竭訳)……「阿彌陀佛、壽命無量、百千億劫、當有終極。善男子、當來廣遠、不可計劫、阿彌陀佛、當般涅槃。般涅槃後、正法住世、等佛壽命。在世滅後、所度衆生、悉皆同等。佛涅槃後、或有衆生、不見佛者、有諸菩薩、得念佛三昧、常見阿彌陀佛」(『大正藏』第十二卷、三五七上)。

- (15) 「彼國衆生」とは安樂世界の衆生である。同じく極樂に往生した者でも、念仏による場合と諸行によった場合では、果報に差異があることを述べている。第一大門第七には、「『觀世音菩薩授記經』に、「阿彌陀仏が涅槃に入つた後も、深い善根を積んだ衆生は、以前と変わらず「仏を見る」と説かれているのが、その教証である」とある。「安樂集」訳註(一)第一大門」六九〜七十頁(『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第四号、二〇一八年)。

- (16) 良忠は『安樂集私記』巻下において、「遠益」を『無量壽經』流通分の「特留此經止住百歳」と解釈するが(『淨土』第一卷、七三七下)、文脈から判断するならば「終益」と見做すほうが妥当である。

- (17) 『般舟三昧經』(支婁迦讖訳、一卷本)……「菩薩於此間國土、念阿彌陀佛專念故得見之。即問、持何法得生此國。阿彌陀佛報言。欲來生者當念我名、莫有休息則得來生。佛言、專念故得往生。常念佛身有三十二相八十種好、巨億光明徹照、端正無比」(『大正藏』第十三卷、八九九上)。「般舟三昧經」(支婁迦讖訳)巻上「行品」第二……「菩薩於是間國土聞阿彌陀佛、數數念、用是念故、見阿彌陀佛。見佛已從問、當持何等法生阿彌陀佛國。爾時阿彌陀佛、語是菩薩言、欲來生我國者常念我數數。常當守念、莫有休息。如是得來生我國。佛言、是菩薩用是念佛故、當得生阿彌陀佛國。常當念如是佛身、有三十二相悉具足光明徹照、端正無比」(『大正藏』第十三卷、九〇五中)。

- (18) 『大智度論』卷七(鳩摩羅什訳)……「復次、佛為法王、菩薩為法將、所尊所重唯佛世尊、是故應常念佛」(『大正藏』第二五卷、一〇九上)。

- (19) 良忠の『安樂集私記』巻下には「法報化也」として(『淨土』第一卷、七三八上)、法身、報身、化身と解釈する。

- (20) 『大智度論』(鳩摩羅什訳)巻七……「復次、常念佛得種種功德利。譬如大臣特蒙恩寵常念其主。菩薩亦如是、知種種功德、無量智慧皆從佛得、知恩重故常念佛」(『大正藏』第二五卷、一〇九上)。

- (21) 『大智度論』(鳩摩羅什訳)巻七……「是菩薩念佛故、得入佛道中、以是故念佛三昧常現在前。復次、念佛三昧能除種種煩惱及先世罪。餘諸三昧、有能除姪不能除瞋、有能除瞋不能除姪、有能除癡不能除姪、有能除三毒不能除先世罪。是念佛三昧、能除種種煩惱、種種罪」(『大正藏』第二五卷、一〇九上)。「大智度論」(鳩摩羅什訳)巻二九……「復次、菩薩常善修念佛三昧因緣故、所生常值諸佛。如般舟三昧中說。菩薩入是三昧、即見阿彌陀佛」(『大正藏』第二五卷、二七六上)。「大智度論」(鳩摩羅什訳)巻三十七……「所生處常值諸佛者、是菩薩除諸佛母般若波羅蜜、其餘一切衆事皆不愛著。是以在所生處、常值諸佛。如人常喜鬪諍、生還活地獄、復執刀杖共相加害。姪欲多故、常受胞胎。又作姪鳥。瞋恚多故、還生毒獸、蛇虺之屬。愚癡多者、如燈蛾赴火、地中隱蟲等。是諸菩薩愛敬於佛、及實相般若波羅蜜、及修念佛三昧業故、所生處常值諸佛。復次、如先菩薩願見諸佛中說終不離見佛者、又人雖一世見佛、更不復值。如毘婆尸佛時、王師婆羅門、雖得見佛及僧、而惡口毀訾、言、此人等如畜生、不別好人、見我不起。以是罪故、經九十一劫墮畜生中。復次、深念佛故、終不離佛。世世善修念佛三昧故。不失菩薩心故。作不離佛願。願生在佛世故。種值佛業緣常相續不斷故、乃至阿耨多羅三藐三菩提、終不離見佛」(『大正藏』第二五卷、三三三中)。

- (22) 『大方廣仏華嚴經』(仏駄跋陀羅訳)巻一四「兜率天宮菩薩雲集讚仏品」第二十……「寧於無量劫、具受一切苦、終不遠如來、不觀自在力」(『大正藏』第九卷、四八七下)。

- (23) 『大方廣仏華嚴經』巻七(仏駄跋陀羅訳)「賢首菩薩品」第八之二……「念佛三昧必見佛、命終之後生佛前、見彼臨終勸念佛、又示尊像

令瞻敬」(『大正蔵』第九卷、四三七中)。

- (24) 大乘仏教の菩薩が理想を指して実践する行のことを指す。具体例として般若訳『華嚴経』『普賢行願品』に説かれる普賢菩薩の十大願がある。『無量寿経』(康僧鎧訳)第二三願では、「設我得佛、他方佛土、諸菩薩衆、來生我國、究竟必至一生補處。除其本願自在所化、爲衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脱一切、遊諸佛國、修菩薩行、供養十方諸佛如來、開化恒沙無量衆生、使立無上正眞之道。超出常倫諸地之行、現前修習普賢之德。若不爾者、不取正覺」(『大正蔵』第十二卷、二六八中)とあり、菩薩があえて一生補處に入らずに、堅い誓願を立てて、功德を積み、多くの衆生を済度し悟りへ導くことが普賢の徳とされ、菩薩が歩むべき理想の菩薩として普賢菩薩が挙げられている。

- (25) 『大方広仏華嚴経』卷四十六(仏駄跋陀羅訳)「入法界品」第三十四之三……「善男子。我唯知此普門光明、觀察正念諸佛三昧。豈能了知菩薩圓滿清淨智行。諸大菩薩、得圓滿普照念佛三昧門、悉能親見一切諸佛及其眷屬、嚴淨佛刹。得一切衆生遠離顛倒念佛三昧門、隨一切衆生所應、悉令清淨。得一切力究竟念佛三昧門、正念修習諸佛十力。得諸法中心無顛倒念佛三昧門、悉得親見一切佛雲、於彼佛所、聞法受持。得分別十方一切如來念佛三昧門、悉見一切世界海中諸如來海。得不可見不可入念佛三昧門、於微細境界見一切佛自在境界。得諸劫不顛倒念佛三昧門、於一切劫常見諸佛未曾遠離。得隨時念佛三昧門、於一切時常見諸佛。得嚴淨佛刹念佛三昧門、起一切佛刹無能壞者、普見諸佛。得三世不顛倒念佛三昧門」(『大正蔵』第九卷、六九〇上)。

- (26) 『海龍王経』においては阿弥陀仏・極樂浄土・往生について説かれておらず、ただ「現世において諸仏から離れない」ための八法が示されているだけである(海龍王の質問は「何謂菩薩不離諸仏」(『大正蔵』第十五卷、一三二下)。そして阿弥陀仏は諸仏の中の一仏という位置づけにすぎない。ところが、道綽は経文の「願生彼国志不怯弱」をもって阿弥陀仏の浄土に往生するものと理解している。経文の意味としては、あくまでも諸仏の世界に往生したいと願いながら心を強く

堅持することで、往生する前の娑婆世界での不離仏が実現するという意味であって、道綽が示したような往生後に不離仏を成就するという意味ではない。ここは道綽による大胆な解釈が行われたと言えるだろう。

- (27) 『海龍王経』(竺法護訳)卷一「行品」第一……「復有八事、不離諸佛、何等八。常念諸佛、供養如來、嗟歎世尊、作佛像形、勸化衆生、使見如來、其所向方、聞佛之名、願生彼國、志不怯弱、常樂微妙、佛之正慧。是爲八事」(『大正蔵』第十五卷、一三三上)。

- (28) 原文では、「若し能く一事として具足し欠くことなくば、当に十事は悉く皆な清淨なりと知るべし」とあるように、経文は一事も欠けずに十事をすべて具足するという文脈であるが、道綽は一事だけ具えていれば他の九事も自ずから具わったことになる」と解釈している。これに関しては良忠『安樂集私記』の記述が有益である。「答意者一法行者亦得往生。如寶雲經十行中一行佛言得生。以十行例八法、一法亦生。問、唯修一行。何具餘行。答、一行功用各通餘行故、修一行當修餘行」(『浄土宗全書』第一卷、七三八下)。

- (29) 『宝雲経』(曼陀羅仙訳)卷六……「除蓋障菩薩白佛言、世尊、若十事不具能生浄土不。佛即答言、善男子、若能於一事、具足無闕、當知十事、悉皆清淨」(『大正蔵』第十六卷、二三六下)。

- (30) 『大樹緊那羅王所問経』の原文では、あくまでも現にまします仏の所に「往」き見仏すると説いているが、道綽は経文の「往」を浄土に往くという意味で理解し、経文に「皆作往生、見如來意」を加えることで、浄土に往生して見仏すると読み替えている。『大樹緊那羅王所問経』(鳩摩羅什訳)卷一……「菩薩成就四法、不離見佛。何等四。自往見佛、亦勸衆生。自往聽法、亦勸衆生。自發菩提心、亦勸衆生、發菩提心。常不捨離、念佛三昧」(『大正蔵』第十五卷、三七〇上)。

- (31) この一段は『大樹緊那羅王経』の趣意文である。原文では「菩薩の行法」として良い行為が三種ほど紹介されているが、道綽はここに悪逆の行法をわざわざ加筆している。とりわけ「五逆不孝是刀山、劍

樹、灌湯器」の箇所はそれが甚だしく文脈にそぐわない。道綽がこの文章を創作し挿入した理由は不明であるが、あるいは五逆不孝の者でも往生して見仏することが可能であると表明しようとしたのだろうか。

- (32) 『大樹緊那羅王經』（鳩摩羅什訳）卷四……「菩薩法器有三十二。何等三十二。佛所護持是菩提心器。專心質直は無偽器。增長志意是善根器。修行於道是菩提柱器。正意思念是多聞器。慧是出道器。進是集義器。施是大富器。戒是滿願器。忍是三十二丈夫相器。進是一切佛法之器。禪是練心器。慧是度障器。大慈是等諸衆生器。大悲是救拔貧窮器。大喜是喜樂佛法器。大捨是捨離愛恚器。善知識是諸善根器。修進多聞是般若波羅蜜器。出家是離縛礙之器。阿練兒處是少事務無惱亂器。樂於寂靜是諸禪定神通之器。四攝法是化衆生器。護持諸法是照明器。陀羅尼是聞於一切未聞法器。辯才是斷一切疑器。念佛是得見諸佛器。無惱害心是護一切善根之器。空法是斷我見之器。因緣是捨諸所珍器。無生法忍是捨諸障礙授記器。緣不退地は無畏器。善男子。是為菩薩三十二法器」（『大正藏』第十五卷、三八五中）。

- (33) 『月灯三昧經』（那連提耶舍訳）卷一……「念佛相好及德行、能使諸根不亂動、心無迷惑與法合、得聞得智如大海、智者住於此三昧、攝念行於經行所、能見千億諸如來、亦值無量恒沙佛」（『大正藏』第十五卷、五五三上）。

- (34) 『大智度論』（鳩摩羅什訳）卷七「初品中佛土願釋論」第十三……「汝言云何常念佛不行餘三昧者。今言常念亦不言不行餘。行念佛三昧多故言常念」（『大正藏』第二五卷、一〇九中）。

- (35) 『大智度論』（鳩摩羅什訳）卷七「初品中佛土願釋論」第一三……「復次、念佛三昧能除種種煩惱及先世罪。餘諸三昧、有能除姪不能除瞋、有能除瞋不能除姪、有能除癡不能除姪、悲、有能除三毒不能除先世罪。是念佛三昧、能除種種煩惱、種種罪」（『大正藏』第二五卷、一〇九上）。

- (36) 『惟無三昧經』は現存しないが、『惟務三昧經』として『出三藏記集』卷五に載録される疑經である。牧田諦亮『疑經研究』十、十二頁

（京都大学人文科学研究所、一九七六年）。

- (37) 『經律異相』卷三十七……「昔人不信罪福。年已五十、夢見殺鬼、欲來取之。眠覺惶怖、求師占夢。師作卦兆云、有殺鬼、必欲相害、不過十日。若欲攘此、從今已去、十日中間、受佛五戒、燒香燃燈、懸繪幡蓋、信向三寶、可免此死。即依此法、專心信向。殺鬼到門、見作功德、不能得害、鬼即走去。其人緣斯、壽滿百歲、死得生天（出雜譬喻經）」（『大正藏』第五三卷、二〇一中）。現存する『雜譬喻經』には類似的説話は見出せない。

- (38) この第三問答は念仏三昧の実践が障りを除き福利を得て寿命を延ばすことを諸經を引用することで証明しようとしている。ところがここでは執持長者が仏に戒を返したことで惡鬼に打たれると説くだけで、念仏三昧によつてその難を逃れ長寿を得ることは示されていない。したがつて現存する『安樂集』はその肝心な部分が欠落しているのかもしれない。

- 『經律異相』及び現存する『雜譬喻經』にも類似的説話は見出せないが、ここはおそらく『灌頂三帰五戒帶佩護身呪經』（『大正藏』第二一卷、五〇三中下）を想定しているのではないかと考えられる。それによると、執持長者は仏から三帰五戒を受けていながら、破戒する人を見て心穏やかならず、自分のような凡人にはとても嚴持できそうにないと思ひ、かつて受けた三帰五戒を仏に返そうと申し出る。ところが、それを言い終わらないうちに、長者の口の中に諸鬼神が代わるがわる現れて懊惱させる。恐怖に慄いた長者は仏に哀れみを求めて懺悔し、再び三帰五戒を受け月六斎・年三長斎を持ち、焼香散華し雜幡蓋を懸け三宝に供事すると誓う筋書きである。ただし、ここでも念仏または念仏三昧のことは説かれていない。

- (39) 『大方広仏華嚴經』（仏駄跋陀羅訳）卷二十三「十地品」第二十二之一……「菩薩住歡喜地、多作閻浮提王、豪貴自在、常護正法、能以大施攝取衆生、善除衆生慳貪之垢、常行大施。而無窮盡。所作善業、布施、愛語、利益、同事。是諸福德、皆不離念佛、不離念法、不離念諸

同行菩薩、不離念菩薩所行道、不離念諸波羅蜜、不離念十地、不離念諸力、無畏、不共法、乃至不離念具足一切種智」(『大正藏』第九卷、五四七中)。なお本經文の前後には「以上樂具供養諸仏及一切僧」(『大正藏』第九卷、五四六下)、「以衣被飲食臥具医薬資生之物而供養之」(『大正藏』第九卷、五五〇上)とある。

- (40) 当問答で用いられる灯明の譬喩は、『大智度論』卷六の以下の文を下敷きにしていられると考えられる。「譬如一燈能除闇得有所作更有大燈倍復明了。佛及菩薩斷諸結使、亦復如是。菩薩所斷雖曰已斷。於佛所斷猶爲未盡。是名得無量清淨智。故於諸法中意無罣礙」(『大正藏』第二五卷、一〇六下)。なお良忠の『安樂集私記』卷下では、「灯光之譬大論之文也」(『浄土宗全書』第一卷、七三九下)としているが、当該の文のことを指すのであろう。

- (41) 『菩薩瓔珞本業經』(竺仏念訳) 卷下……「其人略行十心。所謂信心、進心、念心、慧心、定心、戒心、迴向心、護法心、捨心、願心」(『大正藏』第二四卷、一〇一七上)。この十心は十信に相当する。

- (42) 『菩薩瓔珞本業經』(竺仏念訳) 卷下に「佛子。從不識始凡夫地、值佛菩薩教法中起一念信、便發菩提心。是人爾時住前。名信想菩薩、亦名假名菩薩、亦名名字菩薩」(『大正藏』第二四卷、一〇一七上)というのに基づくのであろう。また「信想輕毛」とは心のはたらきが弱いもの、「仮名」とは名ばかりの菩薩、「不定聚」とは覺悟できるか不確かなもの、外凡夫とは十住にも入れない十信以下の凡夫、そして火宅は『妙法蓮華經』卷二譬喩品における三車火宅に説かれているように、迷いの世界に安住していることの譬喩表現である。

- (43) 『菩薩瓔珞本業經』(竺仏念訳) 卷上で説かれる菩薩の階位の取意であらう。

- (44) 『阿毘達磨俱舍釈論』の本文中には「難行」とは記されているが、「易行」については示されていない。

- (45) 『阿毘達磨俱舍釈論』(真諦訳) 卷九……「如此大劫、次第數至第六十處、説名一阿僧祇。度一更如此數名第二、第三亦爾。故説三阿僧祇。

非一切方便所不能數、故名阿僧祇。衆生先已發願、云何復須此最長時修行、方得無上菩提。如此事云何不應有。何以故。由大福德智慧資糧行、六波羅蜜百萬難行道。於大劫三阿僧祇中、無上正覺果諸菩薩方得」(『大正藏』第九卷、二二一中下)。

- (46) 『阿毘達磨俱舍釈論』(真諦訳) 卷九……「若由別方便、有解脫理、何用久修此大難行道。爲他故須如此大功用。云何我等從大苦流。有能爲拔濟他。由此意故、久劫修行」(『大正藏』第二九卷、二二一下)。

- (47) 『無量壽經』(伝康僧鎧訳) 卷下……「佛告阿難。……(中略)……其有衆生、欲於今世見無量壽佛、應發無上菩提之心、修行功德願生彼國」(『大正藏』第一二卷、二七二中)。

- (48) 『讃阿彌陀仏偈』……「若聞阿彌陀德號 歡喜讚仰心歸依 下至一念得大利 則爲具足功德寶 設滿大千世界火 亦應直過聞佛名 聞阿彌陀不復退 是故至心稽首禮」(『大正藏』第四七卷、四二二下)。

- (49) 『觀無量壽經』にはこの文は説かれていないが、上品上生から下生下品までには、すべて命終後の往生浄土を説いている。

- (50) 『大乘起信論』(真諦訳) ……「復次衆生初學是法、欲求正信其心怯弱、以住於此娑婆世界、自畏不能常值諸佛親承供養。懼謂信心難可成就意欲退者、當知、如來有勝方便、攝護信心。謂以專意念佛因緣、隨願得生他方佛土、常見於佛、永離惡道」(『大正藏』第三二卷、五八三上)。

- (51) 『阿彌陀鼓音声王陀羅尼經』(失訳) ……「爾時世尊告諸比丘。今當爲汝演説、西方安樂世界、今現有佛、號阿彌陀。若有四衆、能正受持彼佛名號、……(中略)……若有受持彼佛名號、堅固其心、憶念不忘、十日十夜、除捨散亂、精勤修集念佛三昧、知彼如來常恒住於安樂世界」(『大正藏』第一二卷、三五一中下)。

- (52) 『大法鼓經』(求那跋陀羅訳、『大正藏』第九卷、二九〇中—三〇〇中) 全二卷には、このような説示は見られない。

- (53) 『灌頂隨願往生十方浄土經』(帛尸梨蜜多羅訳) ……「若人臨終未終

之日、當爲燒香然燈續明、於塔寺中表刹之上、懸命過幡轉讀尊經竟三七日、所以然者命終之人、在中陰身如小兒、罪福未定應爲修福。願亡者神使生十方無量刹土。承此功德必得往生。亡者在世若有罪業應墮八難、幡燈功德必得解」(『大正藏』第二一卷、五二九下)。

(54) 『灌頂隨願往生十方淨土經』(帛尸梨蜜多羅譯)……「爲亡者修福、如餉遠人無不獲果」(『大正藏』第二一卷、五二九下—五三〇上)。

(55) 『大法鼓經』(求那跋陀羅譯)卷上……「作比丘持佛名、宣揚此經。不顧身命、百年壽終、生安樂國、得大神力、住第八地。一身住兜率天、一身住安樂國」(『大正藏』第九卷、二九四下)。

『大法鼓經』(求那跋陀羅譯)卷下……「時諸大衆語童子言。汝已授記。

爾時世尊復告大迦葉言。今汝迦葉、如守田夫無善方便、不能堪任護持此經。今此童子聞此經已、能善誦讀、現前護持、爲人演說。常能示現爲凡夫身、住於七地。正法欲滅餘八十年。在於南方文荼羅國、大波利村、善方便河邊、迦耶梨姓中生。當作比丘持我名、如善方便守護田苗。於我慢緩懈怠衆中、離俗出家。以四攝法而攝彼衆。得此深經誦讀通利、令僧清淨。捨先所受本不淨物、爲說大法鼓經。第二爲說大乘空經、第三爲說衆生界如來常住大法鼓經。擊大法鼓、吹大法、設大法會、建大法幢、當於我前被弘誓鎧。盡百年壽常雨法雨、演說此經。滿百年已、現大神力、示般涅槃。說如是記、釋迦牟尼佛、今來至此、悉當瞻仰恭敬禮拜。如是如來常住安樂、諸仁當觀眞實常樂如我所說。爾時空中、十方諸佛皆悉現身、說如是言。如是如是如汝所說、一切皆當信其善說」(『大正藏』第九卷、二九九下)。

(56) 『大悲經』(那連提耶舍譯)卷二……「彼祁婆迦比丘、修集無量種種最勝菩提善根已、而取命終、生於西方過億百千諸佛世界無量壽國」(『大正藏』第二一卷、九五五下)。

(57) 『大般涅槃經』(曇無讖譯)卷一九……「大王、假使一月常以衣食供養恭敬一切衆生、不如有人一念念佛、所得功德十六分一」(『大正藏』第二一卷、四八〇上)。

(58) 『增一阿含經』(瞿曇僧伽提婆譯)卷三四……「阿難當知、此閻浮提

地南北二萬一千由旬、東西七千由旬。設有人供養閻浮里地人、其福爲多不。阿難白佛言、甚多甚多世尊。佛告阿難、若有衆生如犍牛頃、信心不絕修行十念者、其福不可量無有能量者。如是阿難、當求方便修行十念」(『大正藏』第二卷、七四〇上)。教証として用いられる『增一阿含經』の十念とは、十種の念(念仏、念法、念僧、念戒、念施、念天、念休息、念安般、念身、念死)であって、阿弥陀仏を十念することではない。また、経文ではこの十念によって欲界に生まれると説いているだけで、極樂浄土への往生は説いていない。小乗の『増一阿含經』類に往生浄土が説かれている道理はなく、道綽は自説を論証するために小乗經典も躊躇せずに引用している。

(59) 『摩訶般若波羅蜜經』(鳩摩羅什訳)卷二……「但以敬心念佛、是善根因縁乃至畢苦其福不盡。須菩提、置是敬心念佛、若有善男子善女人但以一華散虛空中念佛、乃至畢苦其福不盡。須菩提、置是敬心念佛散華念佛、若有人一稱南無佛、乃至畢苦其福不盡」(『大正藏』第八卷、三七五上)。原文は「散心念仏」であるけれども、『摩訶般若波羅蜜經』の「敬心念仏」の方が意味が通る。あるいは「敬心」を「散心」と誤写されたものが伝わってきたのだろう。

(60) 『大智度論』(鳩摩羅什訳)卷一七……「多聞持戒禪 未得無漏法雖有此功德 此事不可信」(『大正藏』第二五卷、一八九上)。

(61) この「若欲向西修習」の「向」は、会話文に多くみられる口語表現で、場所を示す前置詞の「在」や「於」と同義である。したがって、極樂浄土における禪定修行という意味になる。この第二節の冒頭にある「此彼禪觀」とは、娑婆と浄土にそれぞれ身を置いて修める禪觀という意味である。以下の用例中の「向」はすべてその用法として使われている。『阿育王伝』卷七「相師占言、此是兒志乃至初生、即名須達、後以漸長大、辞父母出家、翹勤精進、得阿羅漢。少欲知足、兼多知識、心稀閑靜、在迦房中、向香山中住。大軍王命終、難看王恋慕懊惱、種種供養、後為起塔。多弟子三藏將數百千衆、向拘舍弥說法。難看王向三藏所聽法、即除去憂愁。於仏法所得信敬心」(『大正藏』第五

○卷、一二七上）、『賢愚經』卷一「母人告曰、汝到王所、為我白王、不知何故。我向夫家、思父母舍。父母舍住、思念夫家」（『大正藏』第四卷、四二八下）、『法苑珠林』卷五二「唐京都市北店有王会師者。其母先終、服制已畢。至顯慶二年內、其家乃產一青黃母狗。会師妻為其盜食、乃以杖擊之數下。狗遂作人語曰、我是汝姑。新婦杖我大錯。我為嚴酷家人過甚、遂得此報。今既被打、羞向汝家」（『大正藏』第五三卷、六七八下）。

- (62) 『無量壽經』と言われるが、この文が見当たらない。しかしこの後（第五大門第三節）の「依大經云」の文を意図していると考えられる。
- (63) この文と類似した文として、『続高僧傳』（道宣）卷二四（釈法琳伝）「行則金蓮捧足坐則寶座承軀。出則天主導前、入則梵王從後」（『大正藏』第五〇卷、六三七中）、『弘明集』（道宣）卷一一「行則金蓮捧足。坐則寶座承軀。出則帝釋居前、入則梵王從後」（『大正藏』第五二卷、一六七下）、『集古今佛道論衡』（道宣）卷丙「行則金蓮捧足。坐則寶座承軀。出則天主導前、入則梵王從後。」（『大正藏』第五二卷、三八〇中）、『破邪論』（法琳）卷下「行則金蓮捧足。坐則寶蓋承軀。出則帝釋居前、入則梵王從後」（『大正藏』第五二卷、四八七上）と出てくる。

- (64) 『無量壽經』の全体の意を取ったもの。

- (65) 『観仏三昧海經』（佛跋陀羅譯）卷九……「東方善德佛告大衆言、汝等當知我念過去無量世時、有佛世尊、名寶威德上王如來應正遍知。彼佛出時亦如今日說三乘法。時彼佛世有一比丘有九弟子。與諸弟子往詣佛塔禮拜佛像。見一寶像嚴顯可觀。既敬禮已目諦視之說偈讚歎。隨壽脩短各自命終、既命終已生於東方寶威德上王佛國土、在大蓮華結加趺坐忽然化生。從此已後恒得值遇無量諸佛、於諸佛所淨修梵行、得念佛三昧海。既得此已諸佛現前即與授記、於十方面隨意作佛。東方善德佛者則我身是。南方栴檀德佛、西方無量明佛、北方相德佛、東南方無憂德佛、西南方寶施佛、西北方華德佛、東北方三乘行佛、上方廣衆德佛、下方明德佛、如是等十佛世尊、因由禮塔一讚偈故、於十方面得成

為佛。豈異人乎、我等十方佛是。時十方佛從空而下放千光明、顯現色身白毫相光、各各皆坐釋迦佛床、各伸右手摩阿難頂告言、法子、汝師和上釋迦牟尼。百千苦行無數精進、求佛智慧報得是身。光明色相今為汝說。汝持佛語為未來世天龍大衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷。廣說觀佛法及念佛三昧。說是語已然後、問訊釋迦文佛起居安隱。既問訊已放大光明各還本國」（『大正藏』第一五卷、六八八中下）。

- (66) 『灌頂隨願往生十方淨土經』卷十一（帛尸梨蜜多羅譯）……「普廣菩薩摩訶薩又白佛言、世尊十方佛刹淨妙國土有差別不。佛言普廣無差別也。普廣又白佛言、世尊何故經中讚歎阿彌陀刹。七寶諸樹宮殿樓閣。諸願生者。皆悉隨彼心中所欲應念而至」（『大正藏』第二一卷、五二九下）。

- (67) 観音・勢至とこの娑婆世界の衆生とに縁があることについては、『灌頂隨願往生十方淨土經』には説かれていない。ここは「観世音菩薩授記經」に基づくと思われる。それによると、過去世の金光獅子遊戲如來の時、無量德聚安樂示現國土に威德王が仏法を奉じており、その左右には宝意と宝上の二人の童子が侍っていた。この威德王とは今の釈迦であり、二人の童子とは今の観音・勢至であるとして、「仏告華德藏、於汝意云何。爾時威德王者豈異人乎、我身是也。時二童子、今觀世音及得大勢菩薩摩訶薩是也。善男子、是二菩薩於彼仏所、初發阿耨多羅三藐三菩提心」（『大正藏』第一二卷・三五六下）と説いている。

- (68) 『無量壽經』卷上（康僧鎧譯）……「佛告阿難、法藏比丘、説此頌已、而白佛言、唯然世尊、我發無上正覺之心、願佛為我、廣宣經法、我當修行、攝取佛國、清淨莊嚴、無量妙土、令我於世、速成正覺、拔諸生死、勤苦之本。佛語阿難、時世自在王佛告法藏比丘、如所修行、莊嚴佛土、汝自當知。比丘白佛、斯義弘深、非我境界。唯願世尊、廣為敷演、諸佛如來、淨土之行。我聞此已、當如説修行、成滿所願。爾時、世自在王佛、知其高明志願深廣、即為法藏比丘、而説經言、譬如大海、一人斗量、經歷劫數、尚可窮底、得其妙寶。人有至心、精進求

道不止、會當剋果、何願不得。於是、世自在王佛、即為廣說二百一十億諸佛刹土天人之善惡、國土之粗妙、應其心願、悉現與之。時彼比丘、聞佛所說、嚴淨國土、皆悉觀見。超發無上殊勝之願、其心寂靜、志無所著、一切世間、無能及者。具足五劫、思惟攝取、莊嚴佛國、清淨之行。阿難白佛、彼佛國土、壽量幾何。佛言、其佛壽命、四十二劫。時法藏比丘、攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行。如是修已、詣彼佛所、稽首禮足、遶佛三匝、合掌而住」(『大正藏』第十二卷、二六七中)。

「阿難白佛、法藏菩薩、為已成佛、而取滅度。為未成佛、為今現在。佛告阿難、法藏菩薩、今已成佛、現在西方。去此十萬億刹、其佛世界名曰安樂。阿難又問、其佛成道已來、為經幾時。佛言、成佛已來、凡歷十劫」(『大正藏』第十二卷、二七〇上)。

(69) 『觀無量壽經』(璽良耶舍訳)……「唯願佛日教我觀於清淨業處。爾時世尊、放眉間光、其光金色、遍照十方無量世界。還住佛頂、化為金臺、如須彌山。十方諸佛、淨妙國土、皆於中現。或有國土、七寶合成。復有國土、純是蓮花。復有國土、如自在天宮。復有國土、如頗梨鏡。十方國土、皆於中現。有如是等無量諸佛國土、嚴顯可觀、令韋提希見。時韋提希、白佛言、世尊、是諸佛土、雖復清淨、皆有光明。我今樂生極樂世界阿彌陀佛所」(『大正藏』第十二卷、三四一中)。

(70) 以下の道綽伝にも同趣旨の記載がある。『統高僧伝』卷二十(「習禪篇」)には「自綽宗淨業。坐常而西」(『大正藏』第五〇卷、五九四上)とあり、『浄土論』卷下(「引現得往生人相貌」)には「教諸有緣。各不向西方涕唾便利。不背西方坐臥」(『大正藏』第四七卷、九八中)とある。

(71) 般若經典類にはこの「念般若波羅蜜」の他にも「誦念般若波羅蜜」「憶念般若波羅蜜」「誦誦般若波羅蜜」などと漢訳されている。はたして般若波羅蜜を心に思念するのか、または誦誦するのかが問われるが、鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜經』卷八に、「能聞受持般若波羅蜜、供養、誦誦、為他說、正憶念般若波羅蜜者、十方現在諸仏、亦共擁護是善男子善女人。能聞受持、供養、誦誦、為他說、正憶念般若波羅蜜

者、是善男子善女人、不善法滅、善法轉增」(『大正藏』第八卷、二八一下)とあるように、念般若波羅蜜は般若經を誦誦することとは區別されている。また『大智度論』卷四三には「是時舍利弗作是念。般若波羅蜜是空相」(『大正藏』第二五卷、三七四下)とあり、また劉宋求那跋摩訳『菩薩內戒經』にも「菩薩坐禪、一心念摩訶般若波羅蜜、亦空無所有、意便無愚癡。如是便得三禪」(『大正藏』第二四卷、一〇三〇下)とある。諸法は空性であるという智慧(般若波羅蜜)を思念するという意味もあるが、後述の龍樹の解説にしたがって、ここは誦念するという意味で理解した。

(72) 『大智度論』卷九(鳩摩羅什訳)……「有一比丘、誦阿彌陀佛經及摩訶般若波羅蜜、是人欲死時、語弟子言、阿彌陀佛與彼大衆俱來。即時動身自歸、須臾命終。命終之後、弟子積薪燒之。明日、灰中見舌不燒」(『大正藏』第二五卷、一二七上)。

(73) 『大智度論』卷九(鳩摩羅什訳)……「誦阿彌陀佛經故、見佛自來、誦般若波羅蜜故、舌不可燒」(『大正藏』第二五卷、一二七上)。

(74) 『須弥四域經』……中国撰述經典。現存せず。牧田諦亮『疑經研究』四七(四九頁(京都大学人文科学研究所、一九七六年))。

(75) 『阿彌陀經』の「命濁」を踏まえていると考えられる。

(76) 『無量壽經』卷下(康僧鎧訳)……「當來之世、經道滅盡、我以慈悲哀愍、特留此經、止住百歲」(『大正藏』第十二卷、二七九上)。

(77) 有相無相の問題は第一大門においても取り上げられている。『安樂集』訳註(一)第一大門「七三(七四頁(『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第四号、佛教大学法然仏教学研究センター、二〇一八年)を参照のこと。

(な)がた まさたか 嘱託研究員、佛教大学大学院博士後期課程満期退学
(お)がわ ほうどう 学術研究員、佛教大学大学院博士後期課程

(さい)とう たかのぶ 研究員、仏教学部特別任用教授
(そ)わ よしひろ 研究員、仏教学部教授
(か)とう ひろたか 嘱託研究員、非常勤講師